

---

# ピュアハーツ

RION

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ピユアハーツ

### 【Nコード】

N3856U

### 【作者名】

RION

### 【あらすじ】

入学式後の帰り道。主人公星雲ナギは、公園で探しものをしてい  
るお婆さんに出会った。一緒に探してあげて、探し物を見つけると、  
お婆さんはお礼に13個のタマゴの入った籠をくれました。その  
タマゴをもらった時からナギの日常が変わり始めた。

## プロローグ（前書き）

初めまして、私はRIONです。

今回初投稿させていただきました。

私は小説を書くのは初めてですから、至らない点があると思います  
が、ぜひ読んでみてください。

## プロローグ

私は平凡で平和な日が欲しかった。しかし、その日はいつになっても来なかった。

それは人の闇の心から生まれる魔物『デスイーター』がいたからだ。そいつらは心に悪意を持つ者がいる限り存在し続け、悪しき心に従い、人を襲い、破壊し続ける。

私達はその恐怖の中を生きていくしかなかった。ただ闇を持つ人間がいなくなればいい話なのだが、そういうわけにはいかないのだ。人はそれぞれ闇の心があるからだ。

しかし、そんな私達に救世主達が現れた。彼らの名は『アークジェレイド』。彼らは心のタマゴから生まれる生き物『ピュアハーツ』と共に『デスイーター』と戦った。数々の戦いで『デスイーター』の数が減り、私達はその恐怖から解放された。しかし、奴らは完全に消えたわけではなかった。

そこで『アークジェレイド』は私達にそれぞれタマゴをくれた。そのタマゴは、人の体の中に入って育ち、羽化したら体の外に出る。そしてその羽化した『ピュアハーツ』はその生みの親である人を愛し、守ってくれるというのだった。

今ではタマゴを体の中で育てる人が増えていた。

しかし、全ての人ではなかった。

タマゴが体の中に入るのだから、それが怖くてどうしてもできないのだ。

また、『ピュアハーツ』は心の生き物。すなわち、善心がなければ育てられない。

私は不安で臆病だから育てることなんてできなかった。

それから数年経った。

ある日、一人の少年がかげがえのない仲間と出会って物語が始まった。

## プロローグ（後書き）

いかがでしょうか？

最初はプロローグですが、次回は本編になります。

駄文にならないように気をつけます。

誤字脱字、感想やご意見などがありましたら、ぜひ応募してください。

よろしく願います。

## 13個のタマゴ part1 (前書き)

RIONです！

今回から本編に入ります。

下手ですが、よろしくお願いします。

## 13個のタマゴ part 1

ジリリリリッ！

朝に鳴く鳥と共に目覚まし時計の音が鳴り響く。その時計を止めるためうずくまった布団から腕が出てきて、時計を止めた。

少年「もう、朝か・・・ゆっくりしたいけど、今日は入学式だから・・・」

眠い目をこすり、少年はベットから出た。彼はクローゼットから制服を取り出し、それを持って1階に降り、浴室でシャワーを浴びて制服に着替えてキッチンに入った。

少年「さて、今日は・・・なにも・・・ない」

冷蔵庫のドアを開けると、そこにはバターと牛乳しか入っていないかった。

少年「しかたない。今日はパンとバターと牛乳でいつか」

少年はパンとバターと牛乳を取り出し、リビングに向かった。リビングのテーブルに置き、今日のニュースを見るためテレビをつけて、見ながら朝食をとった。

朝食を終え、片づけを終わらせて、テレビを消して二階に戻り、靴を持って一階に降りて靴を履いて玄関を出た。

玄関を出たら向かいの家の前でほうきを持ったおばさんが出迎えてくれた。

おばさん「あら、ナギ君。おはよう」

少年<sup>ナギ</sup>「おはようございます。おばさん」

おばさん「今日から入学式だね。頑張つてらっしゃい」

ナギ「はい。行ってきます」

ナギと呼ばれた少年はおばさんに見送られて、学校に向かった。

少年の名は星雲ナギ。今年から県立聖天高校に通う一年生。身長は低く、すらりとした体格と強く握ってしまったら折れてしまいそうな細い手足。顔は幼く、髪は耳に掛かるくらいの長さに、透き通るような黒い瞳。初めて会った人は間違いなく少女と思われるが、これでもりっぱな男の子なのだ。

現在、ナギは一軒家で一人暮らしをしているが、実家とはそんなに離れていない。

実家には父、母、姉がいるが、本当の家族ではない。ナギの本当の家族は、ある事件で死んでしまい。星雲家の養子として迎えてくれた。星雲家の人たちはみんなにやさしくしてもらってナギはすくすく育ったのでした。

ナギ「今日は素敵なおことがあるといいな」

ナギは嬉しそうに胸を弾ませながら学校に向かった。

## 13個のタマゴ part 1 (後書き)

すみません。

なんか変な感じに終わってしまいました。

実はこの作品は実家のPCで趣味で作ったんです。

さて、誤字脱字、感想やご意見を募集しています。

よろしく願います。

すみません。また変な感じに仕上がって・・・

13個のタマゴ part 2 (前書き)

ここからはナギの親友たちが出ます！

## 13個のタマゴ part 2

？「おゝい！ナギ〜！」

数歩歩いていると、後ろから男の声が聞こえてきた。振り向くと、何か大きなものがこちらにやってきた。

ナギのそばに近づいたそれは、大きな赤い竜だった。大きいといっても人が二人分乗れるくらいの大きさで、その竜にの顎の左右に斧のような鋭い牙が付いていて、全身に硬い脛が付いていた。

ナギ「やあ、有樹。おはよう」

ナギは竜にまたがっている青年にあいさつした。その青年は身長が170cm高く、服越したが、体格の良い体をしている。その青年の名は坂本有樹。ナギの同い年の学生で親友であった。

有樹「おう。なあ、見てくれ。俺のリユウガ。ここまで大きく育てたんだ。どうだ？」

有樹はリユウガの首をなでながらそう言った。

ナギ「うん。強そうで立派だよ」

有樹「だろう？ちゃんと手入れして、遊んで、鍛えて、ここまで育てたんだ！お前も育ててみるよ！結構楽しいぞ」

ナギ「・・・ん。僕には無理だから。それに育てるの下手だから」

有樹「そんなこというなよ。誰だって最初はそうだって。乗れよ。」

送ってやる」

有樹が手を差し出すが

ナギ「いいよ。歩いて行くから」

有樹「そっか・・・無理すんなよ。お前、体弱いからな」

ナギ「うん。心配してくれてありがとう」

有樹は片手に持った手綱を叩き、リュウガを走らせ学校に向かった。一人残されたナギはそのまま歩いて向かった。

ナギ（僕だつて、本当は育ててみたいよ。でも、タマゴを受け入れる勇気なんてないよ・・・）

そう思いながら進んでいくと、学校にたどりついた。

辺りを見渡すと、生徒たちはそれぞれ一人ずつ卵から生まれたピュアハーツと共に登校していた。

ピュアハーツとは、心から生まれる不思議な生き物。人の体にタマゴを入れて羽化したら、育ててくれた人を守ることが役割。だが中には自然の中で生まれるピュアハーツもいる。

有樹のリュウガのように大きいものやそれよりも大きいもの。小さいもの。姿形や能力はそれぞれある。また、10種類以上のピュアハーツがいる。

？「おはよう。ナギ」

ナギは声の方に振り向くと、そこには青髪のツインテールと少し釣

り上った愛嬌のある目が印象の少女が立っていた。

ナギ「おはよう。あかり」

彼女の名は時乃あかり。ナギとは小さいころからの幼馴染である。

あかり「それにしても、最近ピュアハーツの飼い主が増えたわね」

ナギ「そうだね。ねえ、あかりのは？」

あかり「もちろん、ここにいますよ。出てきて」

あかりは制服のポケットを優しく叩いた。すると中から小さな虫の羽と杖を持った小さな妖精が顔を出した。

ナギ「うわ〜、かわいい〜」

あかり「でしょ。毎日綺麗にして、育てたんだから！」

ナギ「すごいな〜」

あかり「ナギのは？」

ナギ「・・・ごめん。持っていないんだ」

あかり「え！？もってないの？今では誰でも持ってるよ！」

ナギ「・・・うん」

あかり「・・・ま、人にはそれぞれ理由があるからね。行きましょ

うか」

ナギ「どこへ？」

あかり「どこへって、クラス表見によ」

ナギ「あ、そうか・・・」

ナギとあかりはクラス表の所に行った。するとそこにはナギ達の知人がいた。

あかり「お〜い！葵〜！」

葵と呼ばれた少女は振り向いた。彼女の桃園葵。クールな外見に、結いあげた長い髪が印象。ナギ達とは中学からの付き合いで、実は彼女は『アークジェイド』の一員であり、そのため白い改造制服を着ている。それにも関わらず、ナギ達とは親友の関係でいる。

葵「ナギとあかりか」

ナギ「おはよう」

あかり「ねえねえ、葵は何クラス？」

葵「ああ、私はAクラスだ。ちなみにナギとあかりはBクラスだ」

あかり「やった！またナギと一緒にだ！」

葵「それと、坂本も一緒だ」

あかり「・・・あいつも一緒なのか」

あかりの表情がナギと一緒にのクラスになれたことよりも暗くなった。

葵「どうした？何かあったのか？」

あかり「うん。別になんでもないよ」

そう言って、あかりの表情が元の明るさが戻った。

葵「そうか。では私は自分のクラスに行ってくる。またな」

ナギ「またね」

ナギとあかりに見送られた葵はそのまま校舎へと向かった。

あかり「私達も行くところか？」

ナギ「うん」

ナギ達も校舎に向かった。

## 13個のタマゴ part2 (後書き)

お疲れ様でした。

次はこれからナギと一緒にいるメンバーを紹介します。

誤字脱字、感想、意見などがありました。どうぞよろしくお願いします。

## 13個のタムラ parts (前書き)

RIONです。

今回は前回のあとがき通り、新キャラがでます！

### 13個のタマゴ part 3

ナギ達は玄関に入り、靴を替えて自分達の教室に向かった。ナギ達の教室は一階にあり、ドアを開けて中に入った。

有樹「よう！お二人さん！」

最初に迎えてくれたのは、有樹だった。あかりは一瞬不機嫌になった。

あかり「おはよう。坂本」

有樹「おいおい、あかり。いつまでも姓名で言うなよ。名前で呼んでくれよ？前みたいに・・・」

あかり「あかりって言わないでよ!!」

気に障ったのか、あかりは有樹に怒鳴った後、ご機嫌斜めなまま、自分の席に座った。

実は、あかりと有樹は元恋人同士だったが、ある事がきっかけで、その関係が打ち砕かれた。有樹は自分が悪かったとあかりに必死に謝ったが、あかりは許してくれなかった。

ナギ「有樹。あの・・・」

有樹「いいんだよ。今はあれだけど、いつか寄りが戻る日が来るさ！」

ナギ「そうだね・・・有樹、このクラスの中で知っている人いる？」

有樹「ん？ああ、いるぞ。あそこにカメラをいじっている奴がいるだろう？」

有樹の指さす方に見てみると、そこには自分の席でカメラをいじっている小柄の少年が座っていた。

有樹「あいつは仔馬ムツキ。北上中から来た奴だ。奴は盗撮と盗聴のプロだ」

ナギ「なんか、凄そう・・・」

有樹「驚くのはまだ早い。奴にある事を頼めばどんなミッションでもクリアできる！」

ナギ「ミッション？」

ナギが疑問に思っていると、ムツキの所に男子生徒がやってきた。

男「仔馬。例のあれ、できてるか？」

ムツキ「・・・」

ムツキは無言で机の中から一枚の封筒を取り出した。

男「よし、これは報酬だ」

男は財布を取り出し、中から800円を取り出し、封筒と交換した。封筒の中を開けると、一枚の写真が入っていた。

ナギ達は遠くにいるから写真に何が写っているのかわからないが、

その写真を見た男の表情が喜びにあふれていた。

男「かあ~~~~~!!この世に生まれてよかった~~~~~!!」

そう言つて男は喜びのまま去つて行つた。

ナギ「・・・何、あれ？」

ナギは有樹に聞いた。

有樹「ムツキは盗撮、盗聴のプロつて言つたよな？だがそれは女関係じゃないとできない特技なんだ！奴はとんでもないエロだ！奴はこれまで何度も女子更衣室に侵入し、今まで見つかったことのないで伝説の男なんだ！」

ナギ「・・・」

ナギは引いた。今の話から聞いて、もう犯罪レベルだと思つた。

有樹「続いて、あれだ！」

指をさした方を見てみると、そこには自分の席で本を読んでいる銀髪の美女がいた。その美女は他の人とは違うオーラを出していて、抜群なスタイルを持ち、見る男を惑わす魅力があり、まさにこのクラスで高嶺の花と言つていいような美人だった。

有樹「あの女は、エレガント女学院の優等生、御稻荷美咲だ」

ナギ「エレガント女学院つて・・・あのご令嬢が通うあの有名な女子校！？なんでそんな学校の人がここに!?!」

有樹「さあな、理由は俺にもわからん」

二人が話しているうちに、さっきと別の男子が美咲の所にやってきた。

男「あの、エレガント女学院の御稻荷美咲さんですね？」

すると、今まで本を読んでいた美咲が本を閉じて、声のした方に振り向いた。

美咲「そうだけど、私に何か用？」

男「あの、なんであの有名な学校からこの学校に入学したんですか？あなたの実力ならどの有名な学校にも入学できたんじゃない？」

美咲「知りたい？」

男「え？あ、はい！」

美咲「でも、だめ。私はね自分のことを他人に知られるのは嫌いな。ごめんなさい」

そう言つて美咲はまた読書を始めた。

有樹「美人の割には秘密がありそうな女だな。でも俺はあかり一筋だからな！」

ナギ「そうなのかな？」

？「やあ、はじめまして」

すると、二人のそばから誰かが声を掛けてきた。声のした方に振り向くとそこには、美系でさわやかな青年が立っていた。

その青年は身長が高く、顔が小さく、黒髪を後ろに結んでモデルの様だった。その彼が二人に声をかけたのだ。

有樹「なんだ、お前は？」

イズ「僕はCクラスの大泉イズ。よろしくお願いします」

イズは自己紹介をして、礼儀正しく頭を下げた。

イズの佇まいを見ていた周りの女子生徒たち、否、あかりと美咲を除いた女子生徒たちは全員イズに見とれていた。

ナギ「僕、星雲ナギ。よろしくね」

有樹「俺は坂本有樹だ。ところでCクラスのアんたがなんでここに  
いるんだ？」

イズ「はい。自分のクラスの人達とあいさつを終えたので、Bクラスにもあいさつに来たんです」

ナギ「そうなんだ」

イズ「はい。では僕は他の人に会っていかなければなりませんので、これで」

ナギ「またね」

イズは二人から離れ、別のグループになっている所に向かった。」

ナギ「あの人、友好的だね」

有樹「そうだな。それにしもこの学校って、こんなに変わり者がいたっけか？」

そして、しばらく有樹と雑談していると、始業式が始まり、校長の話聞き、教室に戻って自己紹介をして、その後HRになって、放課後になった。

### 13個のタマゴ part3 (後書き)

お疲れ様でした。

人の紹介って結構難しいんですね。

人の姿を言葉で表すのに苦労しました。

さて、次はいよいよあらすじのような展開になります。

誤字脱字、感想、意見などがありましたら、どうぞよろしくお願います。

次を楽しみにしてください。

## 13個のタムロ part 4 (前書き)

RIONです。

すみません。

3日間、学校がありまして、投稿できませんでした。

## 13個のタマゴ part 4

ナギ「終わった〜。今日は始業式だから早く終わったけど。やっぱり長いな〜」

ナギが腕を上には伸ばしていると

あかり「ねえねえ、ナギ。今からカラオケ行かない？」

あかりがそう言つと

有樹「おっ、いいね！今日はパーッと行くか？」

有樹がやってきた。するとあかりが不機嫌になって

あかり「なんであんたまで行くのよ!」

有樹「いいじゃんか！もう一回付き合いなおそうぜ」

あかり「ほつといてよ！もうあんたとは付き合わないから!」

ナギ「あかり、落ち着いてよ!」

ナギはあかりを落ち着かせるため、席を立った。周りの視線が三人に集まった。

あかり「……ごめん、ナギ。私、先に帰るから。カラオケはまた今度ね」

ナギ「……うん」

あかりはそれ以上何も言わず、鞆を持って教室から出た。

有樹「……」

ナギ「有樹……」

有樹「悪かった。もとはお前のダチだよな。今は俺が悪い」

ナギ「……そんなことは……」

有樹「今日は帰るわ。また明日な」

有樹も教室から出て帰ってしまった。

ナギ「有樹……」

ナギは有樹の背中を見て見送った。

なぜあの二人は前は仲の良い恋人同士だったのに、いまは仲が悪くなってしまったのかはナギは知らない。

できることなら、もう一度、二人が元の関係に戻したい。ナギはそう思っている。

午後。ナギは家に帰っても別にやることはないので、今日の昼は定食屋で済まして、夕飯の買い物をして、近所の公園に立ち寄り、そのベンチに座り一休みした。周りを見渡すと、見渡す限り桜が咲いて、春の雰囲気漂っていた。

ナギ「今日も綺麗な桜が咲いているな。こんなに暖かいと眠っち

「やいそう……ん？」

ナギの視界に、いつの間にか地に手を付けて何かを探しているお婆さんの姿があった。ナギは買物袋と鞆をベンチの上に置いて、お婆さんの近くに寄った。

ナギ「お婆さん。何か探し物ですか？」

ナギが声をかけると、地を這っていたお婆さんは頭をあげてナギを見上げた。

おばあさん「ええ。この公園のどこかに、私の大切なお守りを落としてしまいました、あれは亡くなったお爺さんとの思い出が詰まった物で……」

ナギ「それは大変だ！おばあさん、僕も手伝います！」

おばあさん「あ、いいですよ。そんなことをしまくても。もとは落とした私が悪いのですから……」

ナギ「いいえ、気にしないでください。それに一人より二人の方が探しやすいでしょ？僕、向こうの方を見てきます」

そう言つて、ナギは向こう方に行った。

それから数時間後。太陽が沈んで夕陽になってもナギは探し続けた。そしてようやく、お婆さんが探していたお守りを見つけた。

ナギはそれを持って、お婆さんの所へ戻って、お守りを渡した。

ナギ「はい。おばあさん」

おばあさん「ありがとうございます。なんとお礼を言ったらよいか」

ナギ「お礼だなんて、いいですよ。その言葉で十分です」

おばあさん「とんでもない……あ、そうです。これがありました」

おばあさんはお守りをしまい、足元に置いてあったバスケットを手に持ち、ナギに差し出した。

おばあさん「これはお礼です。どうぞお受け取りください」

ナギ「いや、いいですよ」

おばあさん「いえいえ、どうかお受け取りください」

ナギ「はあ、そればお言葉に甘えて……」

ナギは観念して、そのバスケットを受け取った。

おばあさん「蓋を開けてみてください」

ナギ「……はい」

ナギは言われた通り、蓋をあけ中身を見た。すると中には、柔らかいシーツの上に13個のタマゴが円状に並べられた光景が現れた。

ナギ「このタマゴって……あれ？」

顔を上げると、そこにはさっきまで立っていたおばあさんの姿がな

くなっていた。辺りを、見渡しても誰もいなかった。

ナギ「あの人、どこに行っただらろう？」

ふと中央に立っている時計に目を止めると、時刻は6時を指していた。

ナギ「あ、いけない！もうこんな時間！早く帰らないと！」

ナギはバスケットの蓋を閉め、ベンチに置いてある荷物を持って、急いで家に帰った。

ナギが家に急いで向かっている頃、さっきまで公園でナギと一緒にいたおばあさんが、人気のない歩道を一人で歩いていた。そこへおばあさんの目の前に白い改造制服を着た集団が立ち塞がった。

おばあさん「おやおや、アークジェレイドの方々ですな。私に何か用でも？」

すると、集団から一人の男が前に出た。

男「貴様、星天治カンナだな？」

おばあさん「おやおや、私を知っているとは、意外ですな。……ばれないように、変装しているんだけど、さすが、アークジェレイドね」

突然、お婆さんの声が二十代前半の女性の声に変わった。それに、さっきまで曲がっていた腰もまっすぐに伸ばしていた。

男「やはりな。貴様のことは調査済みだ。さあ、さつさとあれを出してもらおうか！」

カンナ「あれ？あれって何のこと？さつぱりわからないな、色々あったから忘れたことあったし」

男「とぼけるな。今まで貴様が肌身離さず大事そうに持っているあのバスケットだ！」

カンナ「ああ、あれね。あれならもうないけど？」

その発言を聞いた男は怒りが溜まって

男「ないだと！？ふざけるな！！今まで大事にしていた物がないだと！正直に出せ！」

カンナ「だからないって言うてるでしょ！ほんと聞き分けのない子ね！」

男「せめて本当の姿で話してほしいものだ。そんな姿ではまるで俺をしかる叔母だぞ。もしやそれが貴様の本当の姿か？」

カンナ「がっ！失礼ね！私だって好きでこんな姿にしてないわよ！」

そしてカンナは服を力いっぱい剥ぎ取った。するとそこには背が高く、黒い服に身を包み、その上にロングコートを着た、セミロングで眼鏡をかけた女性が姿を現した。彼女こそが星天治カンナの本当の姿だった。

男「さて、本題に戻ろう。あれはどこにやった？まさか、アイツら

に渡したわけではないだろうな？」

カンナ「まさか。そんなわけないでしょ？それに、あなた達にあれを使いこなせることができるのかしら？」

男「世界をアイツらから救うためだ。多少の犠牲は覚悟している」

カンナ「そうかしら？」

男「当然だ。少なくともあれには劣るが、俺は強力なピュアハーツを使える。見せてやるうか？」

カンナ「結構よ。……時代は変わったわね。先代のアーケジレイドはピュアハーツと共にデスイーターと戦った。それなのに今ではただ強ければいい戦闘兵器みたいになっちゃって」

男「話は異常だ。あれをどこにやったのか吐いて貰おう。吐かなかつたら強制的に我々と来て貰おう」

男の後ろで立っていた複数の集団が一齐に銃を構えた。

カンナ「脅しても無駄よ。こっちにはこの子がいるんだから」

そう言って、カンナはポケットから謎の鉱物で作られた小さな籠を取り出した。

男「ほう、まだ、持っていたのか？なら私のピュアハーツと戦ってみるか？」

カンナ「……ホント、時代は変わったわね……」

カンナは籠の蓋をあけた。すると、中から強い光が溢れ、周囲を包みこんだ。

男「な、なんだこれは!？」

男たちはその強い光で目を塞いでしまった。光が収まったことを感じ取り、男はおそろおそろ目を開けた。すると、その場にいたカンナの姿が消えていた。

男「しまった!逃げられた!」

男は悔しく、拳を握り、強く地面に叩きつけた。

集団から逃げたカンナは、別の場所にいた。そこは西洋風の大きな屋敷の前だった。

カンナ「ふう、なんとか逃げられた。御苦労さま。トラベル」

トラベル「はい」

カンナは隣に立っていた女性の肩を軽く二回叩いた。その女性はカンナより背が高く、カンナと同じコートを着ていた。体のあちこちに機械的な部分があり、耳があるところには大きく幅の広いアンテナが備え付けられてた。顔は無表情で髪は薄い青のロング。トラベルはアンドロイド型でカンナのピュアハーツなのである。

カンナ「それにしても、なぜ、あの時タマゴが動き出したんだろうねえ?」

トラベル「タマゴ？」

カナナ「ああ、あの公園でね。何も変哲もない少年の前を通ったら、急にバスケットの中のタマゴが動いたの。まるで自分の親を見つけたって感じだった。だから芝居を打って、あの少年にタマゴを渡したの」

トラベル「そうなのですか」

カナナ「それにしても変よね。まだ体の何に入っていないのに動くなんて。あゝあ、今日は疲れた。トラベル、今日の夕飯作っておいてね。私はお風呂に入ってくるから」

トラベル「はい。マスター」

カナナとトラベルは屋敷の中に入った。

## 13個のタマゴ part 4 (後書き)

お疲れ様でした。

今回はいつもより長く書いて、ちょっと疲れてしまいました。  
小説を書くのって思った以上に大変だと感じました。  
でも、続けられるように頑張ります。

誤字脱字、感想、意見がありましたら、お願いします。

初めての感覚（前書き）

RIONです。

一日一話ですいません。

## 初めての感覚

家に帰ったナギは、まずバスケットを自分の部屋に置き、着替えて夕食の支度を始めた。

ナギは実家でもよく料理をやっていたから、かなりうまい。それに料理をやっていくうちに、だんだんと上達していき、そして一流料理人並みの腕前となった。

ちなみに今日の献立は卵スープと八宝菜。

ナギ「いただきます」

ナギ「ごちそうさまでした」

夕食を食べ終えたナギは食器を片づけ、浴室で体を洗って、自分の部屋に戻った。

ナギ「うーん」

ナギはベッドの上に座り、じっとバスケットを見つめていた。

ナギ「受け取ったのはいいけど……どうすればいいんだろう？これ」

ふと、バスケットの蓋を開けてみた。改めてみると13個のタマゴは一つ一つ違う色で違う模様でカラフルだった。

ナギ「それにしても、綺麗な色だなあ。一体どんなのが生まれるんだろう？」

ナギがタマゴに見とれていると、突然13個のタマゴが光り出した。

ナギ「えっ！？な、なに！？」

いきなり何が起こったのか戸惑うナギ。光りだした13個のタマゴはゆっくりと浮かび上がり、ゆっくりのナギの方に一列になって向かってきて円で囲むようにナギの周りを回った。

すると、回っていたタマゴの一つがナギの体に入ってきた。

ナギ「えっ！中に入った……」

すると、続けて他のタマゴも一定の間隔でナギの体の中に入ってきた。

最後のタマゴが入った後、間をおいて行って行った所を撫でてみた。

ナギ「全然痛くない。それに体にも負担がない。何も怖がることなくてなかったんだ。でも、羽化した時はどうすればいいんだろう……」

……」

ナギは悩んだが、深く考えないと決め、今日は早めに寝た。

## 初めての感覚（後書き）

短いです！

でも、次はいよいよナギのピュアハーツが登場します。

誤字脱字、感想、意見などがありましたらよろしくお願いします。

おとめ座の少女 part1 (前書き)

すみません。

前書きが思いつきません。

どうかよろしくお願いします。

## おとめ座の少女 part 1

朝、鳴り響く時計を止めたナギは、なぜか体が重く感じていた。

ナギ「……………なぜだろう？今日は体が重い……………。今日は休みたい気分だけど、でも、初日から欠席なんて、やだ……………」

そう言つて、ベットから出ようと立ち上がったら、バランスを崩しその場に膝をついた。

ナギ「なんだろう？この感じ……………」

ナギはベットに手を置き、立ち上がったそのまま壁に手を付けながら制服と鞆を持って一階に降りた。

朝の準備をできるだけ、やっておいて、家の外に出た。

おばさん「あら、ナギ君、大丈夫？」

向かいの家の前を掃除していたおばさんがナギの行動を見て持っていたほうきを手放して、駆け寄った。

ナギ「あ……………大丈夫です」

おばさん「でも、顔色悪いわよ？今日は学校を休んだ方が……………」

ナギ「大丈夫です。……………心配してくれてありがとうございます」

壁に手をつけながらナギは歩きだした。おばさんはナギを心配そうに見送った。

ナギ「はあ、はあ、はあ……………」

だいぶ進んだところで、ナギは息を荒らして、そのまま体を抱え壁に背を預け、その場にしゃがんでしまった。

ナギ「どうしたんだろう？もしかして、羽化が始まるのかな……」

ナギは昨日のことを思い出した。昨日、彼の中に入ったタマゴに変化が現れたとナギは思った。

？「どうした？ナギ」

そこへ聞き覚えのある声が聞こえた。顔を上げると、そこには赤い竜に乗った有樹が声を掛けてきた。

ナギ「あ……有樹」

ナギの顔色に気付いた有樹は驚いた。

有樹「お前大丈夫か！？顔色悪いぞ！」

ナギ「うん。そうかな？」

有樹「そうかな？じゃねえよ！乗れよ。送ってやる！」

ナギ「ごめん」

差し出した手に捕まって、ナギは有樹の後ろに乗った。

有樹「よし、リュウガ！今日は悪いがゆっくり走ってくれ！」

リュウガは言われた通り、若干速めだが、ゆっくり走った。

おとめ座の少女 part 1 (後書き)

と、いうわけでやっぱり短いです。

こんな駄文ですが、

誤字脱字、感想、ご意見がありましたらどうぞかよろしくお願いします。  
す。

## おとめ座の少女 part 2

場所は変わって、聖天高校。

そこでは相変わらず、ピユアハーツとともに生徒たちは通っていた。校門の前には、幼馴染のあかりがナギが来るのを待っていた。すると、あかりは正面から何か来るのに気づいた。

あかり「あれ？あれは……」

それはリュウガだった。さらにその上には前には有樹と後ろには苦しんでいるナギを乗せてこちらにやってきた。

リュウガが校門前に止まるって、さきに有樹が降りて、次にナギを抱えて降ろして地面に立たせた。それを見計らってあかりが駆けつけて来た。

あかり「どうしたの！？ナギ！」

ナギ「ああ、あかり。おはよう」

ナギは苦しい表情をしたが、無理に笑顔を作った。それはあかりに心配かけたくないと思ったからだ。

あかり「おはようじゃないよ！どうしたの？何か悪いものでも食べたの？」

ナギは首を横に振った。

有樹「なあ、あかり。さきにナギを教室に運んでやってくれ。この時間じゃ、保健室は相手ねえ」

あかり「……………うん。わかった」

有樹を嫌っていたあかりだが、ナギが苦しんでいるから今日は素直に言われたとおりにした。

あかりはナギを抱え、校舎に向かった。

校舎に入ったあかり達を見送った有樹は、ベルトから籠を取り外して、蓋をあけた。すると、リュウガは光だし、粒子になってゆつくりと籠の中に入った。

粒子が入り終わって、籠の蓋を閉め、ベルトにつけた有樹は、あかり達の後を追うため、足を進めた。しかし、有樹は何か違和感を感じた。

有樹「……………なんだ？この感じ……………」

有樹は後ろから違和感の正体を感じて、後ろを向いた。するとそこには

有樹「あ、あれは！」

おとめ座の少女 part 2 (後書き)

やっぱり短くてすみません。

今回はアークジェレイドがナギに接触します。

誤字脱字、感想、意見がありましたらよろしくお願いします。

おとめ座の少女 part3 (前書き)

RIONです。

今回は長めにできました！

駄文になっていると思いますけど……

有樹が見たあれが出ます。

どうぞ、ご覧ください！

### おとめ座の少女 part 3

あかりが、ナギを抱えたまま教室に入り、彼を席に座らせた。そのあとあかりは、ナギの前の席に座った。

あかり「ナギ。何かあったのか事情を教えて。いつまでも黙っていやいけないんだから。あんたはついても他人に迷惑かけないように一人で問題抱えてばかりで……少なくとも私には理由を聞かせて欲しいわ」

ナギ「……ごめん。心配掛けなくなかったんだ」

あかり「いいわよ、謝らなくても。そこが何の取り柄のないナギの良いところなんだから」

ナギ「はは、ありがとう。……あのね、驚かないでね」

あかり「驚くわけないでしょ？私とナギは長い付き合いなんだから、ナギの言葉全部聞き受けてあげる」

ナギ「うん。実は……」

ナギは事情を話そうとした時、誰かが教室の扉を開けた音が聞こえ、その瞬間、教室で騒いでいた生徒たちは静まった。

扉の方に目を向けると、そこには白い改造制服を着た集団が立っていた。その集団は歩き出し、ナギの近くで足を止めた。すると、真中で立っている男性が一步前に出た。

その男性は背が高く、短髪の金髪だが、左右の揉み上げだけが長く垂らしていた。顔は美形で鋭い眼をしていた。その男性がナギにこ

う言った。

男性「君は星雲ナギ君だな？」

ナギ「はい、そうですけど……」

カイ「私は2年A組の黄童カイだ」

ナギ「はあ……」

あかり「あの、あなた方が着てるその服から察するに、アークジェレイドの方々ですよ？ナギに何が御用ですか？」

カイ「ああ。その少年にはピュアハーツのタマゴが入っている。しかも複数の」

あかり「えっ！ナギ、あんたついに飼い始めたの？……でも、今は普通に持っている人がいますから、問題と思うんですけど……」

カイ「確かに問題はない。だが、ピュアハーツのタマゴをもらうときは契約をしなければならぬ。そのため、星雲君は我々のリストに登録はなく、無断でやってしまったことになる」

あかり「そんな……。ナギ、そうなの？」

ナギ「違います。僕は……」

カイ「わかっている。君はあのタマゴを老婆から貰ったんだろ？」

ナギ「どうして、そのことを……」

カイ「我々の情報情報網を甘く見ないでほしいな。その老婆は我々  
アークジェレイドの一員だった」

ナギ「えっ！」

カイ「しかし、奴は我々が研究していた13個のタマゴを勝手に持ち出し、我々を裏切った。しかし、そいつが持っているタマゴを各地の監視カメラとネットワークを駆使して、ついに見つけることができた。それは君の体の中にあるタマゴだ！」

ナギやあかりの他に、その話を聞いていた生徒たちも驚いた。

カイ「さあ、それを渡したまえ。それは並の人間が扱えない強力なピュアハーツだ」

ナギ「でも、どうやって？」

カイ「安心したまえ。君の体を引き裂くような残酷なことはいらない。私にはこれがある」

そう言っただけでカイは、ポケットから黒革の手袋を取り出し、手にはめた。

ナギ「それは？」

カイ「これは、体内に入ったタマゴを取り出す手袋だ。これは主に体内に入ったタマゴが異常を出した時に使われる。これより、星雲ナギからタマゴを取り出す！ケースの用意を！」

男「はっ！」

カイがそう言うと、後ろで立っていた集団の一人が手に持っていたケースを床に置き、蓋を開けた。

カイは手袋をはめた手でナギの胸に手を当てた。

ナギ「あの……」

カイ「心配するな。痛いようにはしない。タマゴが入った時と同じような感覚で出てくる」

ナギ「はあ……」

カイは手に念を入れた。すると、胸に当てた手の周りに円が描かれ、光り出した。

それをまじまじと見る生徒たち。

しかし、まるで拒むように円が歪みだし、手袋に電流の様なものが溢れだした。

カイ「な、なに！？どういうことだ！！」

カイは今までなかったことに驚いた。そして、衝撃波を受けたようにカイはナギから吹き飛ばされた。

それを後ろに構えていた集団がカイを受け止めた。

あかり「大丈夫ですか！？」

あかりがそう尋ねると、カイは顔を上げた。その顔は今までうまくいったことが初めて失敗した時の表情だった。

あかり「あの……」

カイ「信じられない……まるで私を拒んだかのようだ」

あかりの言葉をさえぎって、カイは立ち上がり、再びナギに顔を合わせた。

カイ「しかたない。いったん本部に連れて行き、手術する！星雲君。一緒に来てもらう」

ナギ「手術……」

その時、ナギは何かを恐れるような顔になった。

カイ「どうした？顔色が悪いようだ……」

カイがナギに触れようとした時、廊下の方から有樹が走ってきた。

有樹「大変だ！！」

教室に入ってきた有樹を全員が見た。

有樹「校門前で様子のおかしい奴がいた！あれはきつと、デスイーターにとりついているに違いねえ！」

カイ「なんだと！？」

その時、廊下の方から逃げるように悲鳴をあげる声が聞こえてきた。あかりが廊下に出てみると、その奥には黒い霧を出した男がこちらに歩いてきた。

あかり「あれは……!？」

男「たす……けて……」

男がそう言ったあと、霧は一気に男を包みこんだ。そして霧が晴れるとそこには男の姿がなく、不気味な姿をした巨大な蜘蛛の怪物が現れた。

その怪物は、表面に多くのとげが生えた殻を体全体に覆われ、八本の長い脚には鋭い爪が生えて、口元には鋭い牙が生えていた。

あかり「あれが、デスイーター……」

あかりは初めて心の闇の怪物、デスイーターを目にした。

## おとめ座の少女 part3 (後書き)

デスイーターが登場しました。

デスイーターは心の闇から生まれる生き物。

ピュアハーツが光りなら、デスイーターは闇といった感じ です。

今回はカイのピュアハーツが登場し、バトルになります。戦いを書くのは難しいですが、がんばります。

そして、ナギにも変化が現れます。

誤字脱字、感想、意見がありましたら、よろしくお願いします。

おとめ座の少女 part 4 (前書き)

投稿が遅れてすみません。

学校が忙しくて、暇ができませんでした。

## おとめ座の少女 part 4

蜘蛛の怪物があかりの姿を見た瞬間、まるで獲物を見つけたかのよう  
に走りだし、足に生えた鋭い爪で突き刺そうとした。

あかり「きゃあああああ!!」

もう逃げられない。あかりがそう思った時、教室にいた集団のうち  
二人の男たちが突然あかりの前に駆けつけ、両手を前に広げ、シ  
ールドを張った。シールドに先ほどの怪物の爪が当たっても、シ  
ールドは砕かれなかった。  
怪物は貫けないと悟り、いったん退いた。

男A「怪我はありませんか？」

シールドを張った男の一人が尋ねた。

あかり「あ、はい！大丈夫です！ありがとうございます」

男B「危ないのでですから、教室に避難してください」

あかり「はい。わかりました」

あかりは急いで教室に戻った。

あかりと入れ替わるようにカイと残りの集団が廊下に出た。

カイ「でかしたぞ！あとは私がやる。お前達は私の後ろを守れ！」

集団「はっ!!」

カイは集団より前に出て怪物と向かい合った。後ろにいた集団は一斉に両手を広げシールドを張り、守りの体制に入った。

カイ「さて、狭い場所だが、行くでしょう」

そう言つてカイは、ベルトにつけた籠を取り外し、それを手の上に載せ、蓋をあけた。

カイ「来い！シヴァー！」

カイの籠から強烈な冷気が噴出し、それが一塊になると、シヴァの姿が現れた。氷の塊を下半身にして、上半身はドレスを着た女性の姿をしていた。それがシヴァの姿だった。

シヴァが現れたのと同時に、シールドを張った場所以外は氷に覆われていた。

有樹「すっげー……、あれが伝説と言われていたシヴァか……」

集団の後ろから覗いた有樹は驚いた。

教室では、ナギは前の恐怖が消えず、その場で丸くなっていた。

あかり「ナギ……」

あかりはナギを落ち着かせるため、そつと抱いた。

カイ「奴を始末しろ！シヴァー！」

カイはシヴァに命じた。シヴァは手を前に出し、強烈な冷気が籠つ

た光線を放った。しかし、怪物はかわそうとはしなかった。

カイ「なぜ、避けない？当たれば絶対零度の氷に閉じ込められると  
いうのに……」

光線が近づいた瞬間、予想外のことが起こった。

怪物は口を開き、そこから強烈な火炎を放った。

光線はその火炎に負け、火炎は一直線に走り、

シヴァに衝突した。シヴァはその攻撃をくらい、後ろに倒れてしま  
った。その後ろにいた人たちはシールドで倒れるのを防ごうとした  
が、シヴァは重く、シールドは長く保てなく消え、シヴァの下敷き  
になってしまった。

カイ「奴め！火炎を使えるとは！……まさか奴の体には炎を操る事  
ができるメダルが含まれているということか……！しかし、  
シヴァはもろに火炎を浴びてしまった。これではシヴァがやられて  
しまう。ここは救援を……」

カイが救援を呼ぼうと携帯を取り出した時、何かが彼にめがけて飛  
んできた。カイはそれを交わすと、それが何なのかが分かった。そ  
れは大きくて細い針だった。その針はカイがいた場所に深く刺さっ  
ていた。

カイがその針が飛んできた方を見ると、今度は怪物が人を吐いてき  
た。

カイ「しまった！」

カイは避けられず、糸に体を縛られ、その場で倒れた。

カイ「くっ！私としたことが……！」

カイは倒れたまま怪物をにらみつけるが、怪物はカイを無視して中に入った。  
中に入った怪物はむやみに暴れだした。逃げる者には糸を吐き、触れた物は壊す。その破壊活動を繰り返した。

ナギ「僕らは……死ぬの？」

あかりに抱かれたまま、ナギはそう言った。

その光景を見たナギはあることを思い出した。それはまだナギが小さかった頃、病院でデスイーターが暴れていて、何人の人々が血を流し、命が奪われた。そしてその中にもナギの本当の家族も犠牲になった。ナギはただ一人、その恐怖で体が動けなかった。そんな状態のナギの前にデスイーターが立っていて、ナギを殺そうとした。その時、ナギの前にどこから来たのか一人の影が現れ、ナギを守り、そのデスイーターを葬った。  
そして、立ち去る際に影がナギにこう言った。

“あなたがピンチの時は私がお守りします”

そう言い残して消えた。

今、教室で暴れている怪物がナギ達の前に立ち、爪の生えた足を振り下ろした。

あかり「ナギ！」

ナギ「……!!」

あかりがナギを守ろうと体でナギを覆った。  
その時、ナギの胸が光りだした。

あかり「きゃっ！」

怪物「！」

あかりはまぶしくて、ナギから離れ、怪物はその光で校舎の外まで吹き飛ばした。

カイ「な、何が起こったのだ!？」

カイは体を必死に動かして教室を見た。するとカイは驚いた。

カイ「この光は、羽化が始まるのか!？」

## おとめ座の少女 part 4 (後書き)

今回はいよいよナギのピュアハーツの登場です。

今回は『シヴァ』という名のピュアハーツが登場しました。

ピュアハーツに名前つけるのっているいろいろ悩みますから、こつこつ名前を付けました。

ちなみに今まで登場したキャラクターの身長を書いてみました。

ナギ<ムツキ<あかり<sup>||</sup>葵<sup>||</sup>美咲<イズ<sup>||</sup>カンナ<sup>||</sup>カイ<トラベル  
<有樹

となっております。完璧に余談ですけど。

誤字脱字、感想、意見などがありましたら、どうぞよろしくお願ひ  
します。

それでまた次回にお会いしましょう。

おとめ座の少女 part5 (前書き)

RIONです。

いつも更新が遅れてすみません。

どうぞご覧ください。

## おとめ座の少女 part 5

ナギは今、自分の見に何が起こっているか理解できなかった。デスイーターが襲ってきたとき、突然胸が光りだし、怪物を吹き飛ばした。

ナギ「この光は一体……」

光は収まらず、ずっと輝き続けていた。

その時、その光が縮こまり、白い球体となって体から飛び出した。

ナギ「これは……」

驚くナギだが、その球体が大きく膨らみ、粒子となって消えるとそこには、一人の少女が目を閉じたまま立っていた。

その少女は綺麗な顔にスレンダーな体。それに艶のある白くて長い髪。着ているのは赤い制服と膝丈の短い黒い生地にチェックが入ったスカートと黒いニーズソックス。そして長く伸びた右の揉み上げにはリボンを結んでいた。

その少女がゆっくりと目を開けると、ナギを見た瞬間、少女はナギに抱きついた。

ナギ「君は……」

一瞬驚いたが、少女に抱きつかれたナギは不思議な感じになった。それはどこか懐かしく、とても暖かった。少女が離れると、自分に指をさした。その行為はまるで名前を欲しがっているようだった。

ナギ「名前？」

少女は頷いた。

ナギ「えつと……君の名前は……レーネ、で良いかな？」

考え出して決めた名前を言ってみた。

少女「レーネ……」

少女はその名前を確認して、とても喜んだかのまたナギに抱きついた。その時……

美咲「危ない！」

美咲が声を出した時、ナギ達二人に何かか飛んできた。それはあの怪物が吐いた針だった。その針が真っすぐ二人に飛んできた。しかし、あたる直前にレーネはナギを抱え、かわした。

カイ「あの体勢でかわしただと！」

レーネは抱えたナギを優しく降ろし、床に座らせた。

レーネ「……守ります」

ナギ「え？」

レーネ「私は絶対、あなたを守ります！！」

そう言い残して、レーネはあの怪物をにらみつけた。

怪物がこっちに向かって走り出すと、レーネは怪物に向かってものすごい速さで突進した。

それは一瞬で怪物の前に現れ、驚いた怪物に力を込めた拳を頭に殴りつけ、怪物は勢いよく吹き飛んだ。

教室にいる人達は、レーネの強さに見とれていた。

あかり「凄い……。あの子、あんな体なのに凄い……」

美咲「……それにしても変ね」

あかり「え？」

美咲「普通のピュアハーツは動物か植物、機械系のはずなのに。あの子はまるで人間だわ」

あかり「アンドロイドとは違うの？」

美咲「アンドロイドには耳の部分にアンテナが付いているでしょ？でも、彼女にはそんなものが付いてないわ」

あかり「……確かに。でも、なんであんな姿になったの？」

美咲「それはわからないわ」

あかりと美咲はそんなやり取りをしている横では、必死にカメラを持ってシャッターを押す小柄の少年ムツキがいた。

あかり（こいつは今の状況をわかっているのか……！）

あかりは心の中で突っ込んでいると

レーネに吹き飛ばされた怪物は体勢を立て直し、口から何本もの針を針を吐きだした。レーネは走りながら軽やかなステップでかわし、回し蹴りを放った。そしたら怪物は横に吹き飛び、校舎に衝突した。

カイ「どうしてだ……。なぜ、あんな姿のピュアハーツが生まれるんだ！ピュアハーツは決して人間の姿には生まれてこないはずだ！」

立ち上がる怪物に、レーネは地面に手を付けた。すると、幾何学な模様の魔法陣が現れ、滑らすように投げた。その魔法陣が怪物の足元で止まると、怪物の体が動かなくなった。つまり、怪物の自由を奪ったと言うことになる。

レーネ「次でとどめを刺します！」

ナギ「レーネ！」

ナギの声が聞こえた時、これからとどめをさすレーネは動きを止め、声の方に顔を向いた。そこにはまだふらつく足のまま歩いてくるナギの姿があった。

ナギ「その怪物には、この学校の人を取り込まれているんだ！だから！」

ナギがそう言うと、レーネは安心させるために笑顔を見せた。

レーネ「大丈夫です。私は取りつかれた人を傷つけません。信じてください」

ナギ「……………」

レーネは力をためた。すると、足元におとめ座の紋章が刻まれた魔法陣が現れ、それが片足に吸い込まれるように消えると、飛び上がった。

レーネ「エンジェルダイブ!!」

レーネは片足に強力なエネルギーを纏ったすさまじいキックを放った。怪物は魔法陣によって自由を奪われて避けることができない。

レーネのキックが怪物の体を貫いた。すると貫かれた怪物の体が霧になって一気に上空に昇った。霧が全て上に昇ると怪物に取り込まれた男は無傷のまま、その場に倒れ気絶した。

上に昇った霧はいつたん集まった後、すぐに弾けて消えた。すると弾けた場所から何か光るものが落ちてきて、それをレーネは手で受け止めた。

その後、周囲から拍手が広まった。怪物を倒してくれた感謝の気持ちと守ってくれた感謝の気持ち、そして助けてくれた感謝の気持ちを込めた拍手だった。

レーネはそれを笑顔で校舎全体に手を振った。

その光景を屋上にいる人物がディスプレイターの襲撃から今のことをすべて記録した。

その人物は耳の部分にアンテナがあり、黒いコートを着ていた無表情な女性だった。

？「データ処理中……………データの保存完了」

そう言って、女性は屋上から校舎の裏に飛び降りた。



おとめ座の少女 part 5 (後書き)

やっとナギのピュアハーツ、レーネが登場しました。

やっぱり容姿とバトルは難しいです……

さて、余談ですが、レーネの身長はこれくらいです。

ムツキくあかり＝レーネ

誤字脱字、感想、意見などがありましたら、よろしくお願いします。

姉弟？兄妹？ part1（前書き）

遅れました。

今回は新キャラが出ます。

どうぞご覧ください。

姉弟？兄妹？ part 1

拍手を浴びたレーネはナギのいるところに駆け寄り、いきなり飛びついてきた。

ナギ「わっ！」

なんとか倒れるのをこらえたが、顔に彼女の柔らかいに埋まってしまった。しかし、それほど大きくはない。

身長的にいえば、レーネの方がナギより高い。そのためいやでも胸に当たってしまうのだ。

レーネはナギに抱きつくのが好きであるかのように、ギュッと腕に力を入れ抱きしめた。

ナギ「ち、ちょっと、レーネ！みんな見てるから……」

困り気味なナギは見上げた。しかし、レーネは

レーネ「いいじゃないですか。私はお兄ちゃんに抱きつくの好きなんです」

と、笑顔でそう言った。

ナギ「お兄ちゃんって……ん！」

その時、ナギの後ろから痛い視線が突き刺さった。

後ろを向くと、そこには数人の男子生徒が怖い眼でナギをにらんでいた。

ナギ「えつと……これは……」

カイ「よくやってくれた」

必死に説得しようと考えるナギに先ほど糸に縛られていたカイが彼のもとに来た。

ナギは抱きしめられながらも体と頭の向きを変え、カイと向き合った。

カイ「デスイーターの始末、協力感謝する。だが、君は正直に驚いた。何せ人型のピュアハーツを生み出し、その他、デスイーターに取りついた人物を解放したことは初めてだ。一度君と君の体の中のタマゴを調べたい。拒否権はない」

有樹「ちょっと待てよ！何勝手に！」

有樹が前に出ようとした時、無傷だった男が銃を向けた。

有樹「おい、アークジェレイドは一般人に手を出さないんじゃないのか？」

カイは横目で有樹を見た。

カイ「君が口を出さなければ問題ない」

有樹「てめえ……！！」

今から殴り行こうとするが、銃を向けられた以上、手出しができない。

カイ「さあ、行こう」

ナギ「……」

カイが手を差し出しと、今まで抱きしめていたレーネがナギの前に出て、その手を叩いた。

カイ「なんだ？ 貴様」

叩かれた手を押さえて、レーネを睨んだ。

レーネ「お兄ちゃんの前は私が守ります！」

レーネは拳を握り、腰を低くして構えた。

カイはにやりと笑った。

カイ「ほお、やるのか？ 私はこう見えて売られたケンカは買う主義でね。面白い！ 来い、シヴァ！」

その言葉に反応したシヴァは起き上がり、カイのもとに移動し、横に立った。

カイ「貴様を倒した後、お前が持っているメダルを貰おう」

今にも両者が戦いを始まろうとした時、二階の窓から何かが飛び出してきた。それが勢いよく飛び出すと、カイに向かって急降下してきた。

カイ「あれは……」

それ以上言葉が続かなかつた。なぜならそれにキックされたからだ。カイはその衝撃で崩れた校舎に飛ばされ、さらに崩れた。その横で見えていたシヴァは主ががれきの下敷きになってしまったので助けに行った。

二階から下りてきた人物は、赤いオーラを纏って、腰まで伸びた長い髪に長身でスレンダーな体の女性がカイが立っていた場所に立っていた。

あかり「だ、誰？あの人……」

その女性の放つ威圧感にビビリ気味のあかりは近くにいたムツキに話しかけた。

ムツキ「……あの人はずちの学校の2年生、星雲静香」

あかり「あ、珍しくしゃべった。って、星雲？」

葵「要するに、ナギの姉上だ」

あかり「え！？」

突然現れた葵に驚くが、ナギに姉がいたことに驚いた。

葵「それにあの人はアークジェイド四大幹部の一人だ」

あかり「ええええ！！」

あかりも驚くが他の人達も驚いた。

レーネは静香の威圧感に押され気味だった。

静香はただ、怒りのオーラを出して睨みつけたままだった。相手が動くのを待っているのだろう。静香は自分のピュアハーツを持っているが、弟であるナギに関ると、肉弾戦で戦うことが多い。

ナギ「あの、姉さん？」

威圧感に怯えながらナギは声をかけた。すると彼の声を聞いた瞬間、静香から威圧感とオーラが消え、辺りを見渡した。

静香「あれ？私……なんでここにいるんだっけ？」

自分でもなんでここにいるかわかっていないようで、指を顎につけ、首をかしげた。

ナギ「姉さん。大丈夫？」

静香「その声はナギちゃん！」

静香は声が聞こえた方向に走り、ナギに抱きついた。

レーネ「あー！ーっ！」

レーネは思わず声を上げた。

静香「ケガはなかった？カイの野郎になにかされなかった？ごめんね。私がカイより情報が早ければこんなことには……」

レーネ「ちょ、ちょっと！いつまで抱きついてるんですか！離れてくださいー！」

レーネは強引に二人を引き離し、静香を睨みつけた。

静香「え？誰よ、あなた」

そう尋ねると

レーネ「私はレーネ。私の主、星雲ナギの妹です！」

そう答えた。

静香「妹？」

すると、静香に再びあのオーラが現れた。

静香「ナギ。これはどういうこと？」

静香は怖い眼で睨みつけた。こうなってしまうてはいくらナギでも止めることはできない。

ナギ「ち、ちがうんだ！この子はピュアハーツなんだ！」

静香「ピュアハーツが人の姿ではないと、知っているだろ！」

ナギ（ダメだ……今の発言じゃ、説得にはなれない。ここは何とかしないと！）

そう思ったナギは行動を起こした。

ナギ「あかり！今日は急用ができたから休むって伝えて！」

あかり「え？……ええ、わかった！それにこの状況じゃ、今日は休校になると思うから。鞆は後で持ってくるから！」

ナギ「うん、ありがとう！レーネ、行こう！」

レーネ「え？」

ナギはレーネの手を掴み、静香から逃げた。

静香「こらっ！ナギ！私の目の前で女と一緒に逃げるな！！」

今すぐ追いかけてやろうとするが、後ろから誰かが押さえた。振り向くとそこにはシヴァが静香を押さえていた

静香「離せ！あの女からナギを取り返すんだ！！」

静香は必死に暴れた。

カイ「ダメです！今はこの状況をなんとかしなければなりません！」

シヴァの後ろから、必死に瓦礫の中から脱出してボロボロになったカイがそう言った。

静香「それはあなた達でやりなさいよ！今はそれどころじゃないんだから！」

カイ「はあ……」

カイは体を校舎に向けた。

カイ「本日は休校にする！生徒諸君はすぐ帰宅を！後のご  
とは我々アークジェレイドが責任を持って校舎を復興する！」

姉弟？兄妹？ part 1（後書き）

完全に駄文になりかかっていると思います。

難しいですね。

他の小説を参考にして書いていますが、やっぱり文章になっていないと思います。

さて、今回出たナギの姉、星雲静香の身長はこれくらいです。

イズニカンナニカイニ静香 です。

もっともナギはこの物語に出てくる登場人物の中で一番小さいキャラとしています。

誤字脱字、感想、意見などありましたら、よろしくお願いします。

姉弟？兄妹？ part 2 (前書き)

いつも投稿が遅れてごめんなさい。

学校があったり、うまく文章をまとめるのに時間がかかりました。  
どうぞご覧ください。

姉弟？兄妹？ part 2

一方、静香から逃げた二人は、学校から少し離れた場所まで逃げた。

ナギ「はあ、はあ、はあ……」

ナギは体が弱くて運動があまりやっていなくて、すぐ息切れを起しました。

レーネ「あの〜、お兄ちゃん。大丈夫ですか？」

レーネは心配そうにどこか嬉しそうに顔をのぞいた。

ナギ「……嬉しそうだね？」

レーネ「はい！お兄ちゃんから私の手を握ってくれましたから」

ナギ「え？うわあ！」

いまでも手を繋いでいたことに繋いで、慌てて手を離れた。

レーネ「あーっ！なんで離すんですか！」

そう言っつて、レーネは後ろに回り込み、背中から抱きついた。

ナギ「いや、だって……僕は女の子と手を繋いだことがなくて……」

レーネ「ふーん。でも、私は嬉しいですよ。お兄ちゃんが自分から

手を握ってくれて」

ナギ「……」

レーネが笑顔を見せてくれて、顔が赤くなるナギ。

レーネ「さて、これからどうしますか？」

ナギ「このまままっすぐ帰るけど、今日はお昼と夕食の材料を買いから商店街に行くけど」

レーネ「そうですか。じゃあ私も付いて行って良いですか？荷物運びのお手伝いしますから」

ナギ「……うん。いいけど」

レーネ「はい！お兄ちゃんと初めての買い物、楽しみです！」

ナギ「……」

レーネが喜ぶと照れくさくなって、頬をかくナギ。

ナギ「じゃあ、行こうか」

レーネ「はい」

レーネはナギから離れ、ナギが歩いて行くのをついて行った。

しばらくして、商店街についた。

この商店街はいろんな店があって、八百屋、お肉屋、魚屋、レス

トラン、飲食店、喫茶店など、さまざまな店舗が置いてあって、よく地元の人が立ち寄るとても素晴らしい商店街なのだ。商店街の道を歩いていると、周りの人の目が後ろをついてくるレーネに注目している。特に男性からの視線が多い。店舗で買い物をしていると、店の人がよく聞いてきた。

八百屋「おう、ナギ坊！そっちの嬢ちゃんは誰だ？おまえの姉か？」

ナギ「いいえ、違います」

八百屋「そっか？いや、お前より身長が高い人だったから勘違いしちゃった。わりい」

ナギ「……」

お肉屋で

お肉屋「あら、ナギ君。そちらの子はお姉さん？」

ナギ「いいえ、違います」

お肉屋「あらそうなの？ごめんなさいね。ナギ君がこの人より背が低くて見間違いしちゃったわ」

ナギ「……」

そのあと、店の人や知っている道中の人からも同じ質問をされた。

そして、買い物を終えたナギ達は、公園に立ち寄った。

ナギ「僕って、そんなに身長が低いのか？」

膝について嘆くナギ。

レーネ「大丈夫ですよ。お兄ちゃんが何と言われようと、私のお兄ちゃんです。元気出してください。他人からなんて言われようと、私が守りますから」

ナギ「レーネ……」

レーネの言葉で少し元気が出たナギ。するとそこへ

子供「ママ。あの人たち、何やっているの？」

ママ「きつと慰めてるのよ。偉いわね。落ち込んだ弟を慰めるお姉さん。きつとあの男の子を大切に思っているのよ」

子供「ふーん。ママ、僕もお姉ちゃんが欲しい」

ママ「大丈夫よ。お姉ちゃんの代わりに私がいるから」

子供「うん！」

ナギ「……」

さっきの親子の台詞で再び落ち込むナギ。

先ほど、学校でレーネの戦いを見て、去って行った黒コートを着た

女性は、一軒の大きい屋敷に辿り着いた。  
その屋敷は廃れていて、壁が剥がれていてボロボロだった。

女性「……」

女性は玄関の扉を開けた。

中も同じように廃れていて、床や壁に穴が空いていたり、埃がたまっていたり、天井には蜘蛛の巣が張っていた。

女性は気にせず、玄関に上がって、奥へと歩いて行った。

奥に進むと、一室の部屋の前で止まった。

ふすまを開けると、そこにはゴミが部屋中に広がって人が住みそうにない状況にも関わらず、一人の女性がカップラーメンを食べながら、ラジオを聞いてた。

その女性が帰ってきた女性に気付いた。

女性「あ、お帰り。トラベル」

トラベル「ただいま帰りました。マスター」

女性、星天治カナナは帰ってきた女性、トラベルにそう言った。

トラベル「ご命令通り、少年を監視してきました」

カナナ「ふむ、ごくろうさん。で、戻ってきたってことは何か変化が起こったんだね？」

トラベル「はい。デスイーター出現時にあのピュアハーツが生まれ  
ました」

カナナ「おお！生まれたのか！で？どんなだった？」

カンナは目を広げて、身を乗り出した。

トラベル「それが、今までにないタイプでした。姿からして人に近い存在でした」

カンナ「人に近い存在？でも、ピュアハーツは決して人としては生まれははず……」

トラベル「その時の姿を記録しますので、ご覧ください」

トラベルは壁に目を向けた。そして、耳の代わりについているアンテナをいじった。すると、目が光りだし、まるで映画を見せるカメラのように壁をスクリーン代わりにして、彼女がとった映像を映した。

その映像にはレーネが戦いつている姿が映されていた。

カンナ「この子が？」

トラベル「はい」

カンナ「うん。見た感じピュアハーツって感じじゃないな。あんた同じアンドロイドタイプじゃないの？」

トラベル「それは違います。私達アンドロイドタイプは特殊な電波を放っているのですが、あのピュアハーツは私と違って電波を出していません」

カンナ「わかんないな」

そう言いながら、映像を見ていると、レーネがとどめをさすシーンになっていた。

カンナ「ほう、すごいな。あの力はまさにあのピュアハード。よしっ！」

カンナは立ち上がった。

トラベル「どうなされましたか？」

映像を終えたトラベルは目から光が消え、元の状態に戻った。

カンナ「あの少年に会いに行く」

トラベル「そうですね」

カンナ「そう、私は変装する準備するから、トラベルはさきにあの少年を監視してきて」

トラベル「お言葉ですが、あの少年はアークジェレイドに関り、マスターの知ってしまいました。変装は無意味かと？」

カンナ「何言ってるの？いい、あの少年が知っても、知らなくても、周りにはアークジェレイドの奴ら一般人に紛れて私たちを探してんのよ！」

トラベル「それもそうですね。気づきませんでした。しかし、昨日は変装しても気づかれませんでしたよ」

カンナ「そこは大丈夫。あの後、パソコンであいつらのコンピュータ

夕をハッキングして情報を消したから」

トラベル「そうですか。はい、わかりました。私はマスターが来るまでに少年を監視してきます」

カンナ「お願いね」

トラベルは部屋を静かに出て行った。

カンナ「さて、始めますか！」

カンナは変装の準備を始めた。

姉弟？兄妹？ part 2（後書き）

今回はここまでです。

長く書けました。

星天治カンナがいよいよ、本来の姿でナギと接触します。

そして次回はまた一人ナギのピュアハーツが増えます。

誤字脱字、感想、意見などがありましたら、どうかよろしくお願  
いします。

牡牛座のメイド part 1 (前書き)

投稿がなかなかできなくてごめんなさい。  
短いですがお読みください。

## 牡牛座のメイド part 1

買い物から帰ってきたナギ達は、自宅の前まで帰ってきた。

ナギが門を開け入ろうとしたが、後ろでは買い物袋を持ったレーネが顔を上げて、自宅を眺めていた。

ナギ「どうしたの？」

レーネ「お兄ちゃんの家って、大きいんですね」

ナギ「そうかな？僕にとっては他の家と変わらないと思うよ？」

？「あら？」

声が出た方に振り向くと、そこには向かいの家のおばさんが長ネギが飛び出した買い物袋を持ったおばさんが立っていた。

ナギ「あ、おばさん……」

おばさん「ナギ君。こんな時間に帰ってくるなんて、学校はどうしたの？それとその子は誰？ナギ君のお姉さん？」

ナギ「……」

とりあえず、後者は置いて前者の質問に答えることにしたナギ。

おばさん「そうだったの。それは災難だったわねえ。それにしても一体どうなってるのかしら？ここ最近デスリースターの数が増えて、アークジェレイドの手じゃ、間に合わないのよ」

ナギ「そうですね。一体何が起こったんでしょうか……」

おばさん「とにかく、ナギ君の学校にアークジエレイドの人がいたからよかったけど。今後は注意しておくのよ」

ナギ「はい。気をつけます」

おばさんはそう言って、自分の家に入って行った。

レーネ「お兄ちゃん。今の人は？」

ナギ「向かいの家に住んでいる宝塚時子さん。僕がここに住んでからいろいろお世話になってくれたんだ」

レーネ「そうなんですか。良い人なんですね」

ナギ「うん。僕らも入ろうか」

レーネ「はい」

ナギ達は自分の家に入って行った。

玄関に立つとレーネが先に靴を脱いで玄関から上がると、ナギと向き合った。

レーネ「じゃあ、私は買ってきた物をしまってくださいね」

ナギ「うん。あれ？レーネって冷蔵庫の知らないんじゃないかなかったっけ？」

レーネ「大丈夫ですよ。私達ピュアハーツは主の体の中にいる間、主が知っていること、聞いたこと、見てきたことなどが分かるんです。だから、家の中の構造だってわかります」

ナギ「そうなんだ。じゃあ、お願いするね」

レーネ「はい！」

レーネはナギから買い物袋を受け取り台所のある部屋に向かった。

ナギ「元気があって良い子だな。でも、彼女は本当にピュアハーツなのかな？」

そう疑問に思いながら、靴を脱いで後を追おうとしたら、突然、胸に痛みが出てきた。

ナギ「うっ……っ！」

ナギはその場で胸を押さえ、膝をつき丸くなった。

レーネ「お兄ちゃん！」

部屋から出たレーネが急いでナギの所へ駆け寄った。その時、ナギの周りから強い風が下から吹いてきた。レーネは飛ばされないように持ちこたえた。

ナギ「うっ……っ……っ……っわっ！」

風が収まると、ナギの体から緑の球体が飛び出した。その球体がナギの前で大きく膨らんだ。

ナギ「これって……」

ナギは悟った新たなピュアハーツが生まれたと……

## 牡牛座のメイド part 1 (後書き)

いつもこんな終わり方にしてしまってますみません。

さて、ナギが2つ目のピュアハートが生まれます。

サブタイトルと同じです。

ですが、ちゃんとうまく書けるかどうか不安ですが……

誤字脱字、感想、意見などがありましたらよろしくお願ひします。

## 牡牛座のメイド part 2 (前書き)

お久しぶりです。

文章をまとめることに苦戦して投稿できませんでした。

今回のストーリーは新キャラが出ます。

どうぞ、ご覧ください。

## 牡牛座のメイド part 2

その球体が大きく膨らんで粒子となって消えると、そこには眼鏡をかけた女性が手を前に合わせて立っていた。

その女性は黒のメイド服を着ていて、髪はセミロングで大人びた感じ、それに頭には牛の角と腰には牛のしっぽが生えていた。

その女性がゆっくりと目をあけると、ナギを見たたん、微笑ましい顔になった。

女性「初めまして、ナギ様。私はあなた様から生まれたピュアハーツです。どうぞ、よろしくお願いします」

女性は礼儀正しくお辞儀した。

ナギ「あ、どうも」

ナギも立ち上がってお辞儀した。それにつられてレーネもお辞儀した。

女性「あの、お願いがありますのでいいでしょうか？」

ナギ「いいけど？何かな？」

女性「はい。私に名前を付けて貰ってもいいですか？」

ナギ「ああ、名前ね。そうだね。ピュアハーツだから名前つけないとね。うっん……」

ナギは顎に手を付け、考え出した。

ナギ「カウラ、ってどうかな？」

女性「カウラですか？そうですね。私にぴったりな名前ですね。ありがとうございます」

女性に名前を付けたところで

レーネ「あの、私のこと忘れていませんか？」

レーネが寂しいそうな目で尋ねてきました。

ナギ「あ、そうだった、ごめんね。カウラ。この子はピュアハーツのレーネ」

レーネ「よろしくお願いしますね。カウラさん」

レーネ「はい。よろしくお願いします。レーネさん」

ナギ「さて、もうお昼だから、僕は今からご飯作るから二人は休んでて」

ナギは二人を通り越して、台所があるリビングに入ろうとしたところ

カウラ「待ってください」

数歩進んだところで、カウラに呼び止められたナギは後ろを振り向いた。

ナギ「ん？どうしたの？」

カウラ「いえ、私はナギ様のピュアハーツですから、今日は私がご飯を作ります」

ナギ「いや、いいよ。それにカウラは今日生まれたばかりだから、料理なんてやったことないでしょ？」

カウラ「ご心配せず、私は生まれる前、ナギ様の記憶を少し覗かせてもらいましたから」

ナギ「覗いたって……これは犯罪って言うのかな？」

カウラ「勝手に覗いたことは申し訳ありませんが、でも、私はナギ様のお役に立ちたいんです！お願いします！」

ナギ「……はあ……わかった。今日はカウラに任せるよ」

ナギはあきらめてカウラに譲った。すると、カウラは嬉しそうな顔になった。

カウラ「ありがとうございます！必ず、ナギ様の舌に合う料理を作っ  
つて見せます！」

ナギ「うん。でも、ケガはしないでね」

カウラ「はい！」

カウラは早速台所がある部屋に入って行った。彼女が去った後、今度はレーネが寄ってきた。

レーネ「お兄ちゃん？」

ナギ「……………」

レーネ「私にも、やって欲しいことある？」

ナギ「……………」

対抗意識を燃やしたのか、レーネは自分も役に立ちたいとアピールしてきた。

ナギはそんなことを言われたので、反応に困った。

しばらくして、カウラがご飯ができたと知らせて来て、レーネと一緒にリビングに入った。

席に着くと、テーブルの上にはカウラが作った和風の料理が3人分置かれていた。

ナギ「うわゝ、結構手が込んだ料理だね」

カウラ「はい。ナギ様のために味を工夫して作りました」

ナギ「では早速、いただきます」

レーネ・カウラ「いただきます」

ナギは始めに焼き魚に箸を付け、口に運んだ。カウラはその口にしたら物をずっと見ていた。

カウラ「どうでしたか？」

ナギ「うん、おいしいよ」

カウラは少し安心して胸を撫で下ろした。

ナギ「でも、味に工夫をしすぎて鮭本来の味がなくなっている。料理人はその食材の本来のうまみを出さなければならぬ」

カウラ「……すみませんでした。私はナギ様が喜んでくださると思つて……」

すると、カウラの表情が一転して暗くなった。ナギは少し言い過ぎたと思つて

ナギ「でも、初めてなのにここまで味を出したのは凄いよ。また挑戦してみてよ」

カウラ「え？それは次回も作って良いってことですか？」

ナギ「うん」

そう言うと、カウラは喜び溢れた表情になった。

カウラ「はい！今度こそナギ様が納得できる料理にして見せます！」

ナギ「うん。期待しているよ（天真爛漫って言うのかな？意味がわからないけど……）」

レーネ「確かにおいしいけど、お兄ちゃんが言っていた味ってよくわかりません」

蚊帳の外にいたレーネはそう呟きながら、食事を進んでいた。

ナギ「そう？じゃあ、今日の夕飯は僕が作るよ。カウラもそれでもいい？」

カウラ「はい。ナギ様がおっしゃった味を私も知りたいですから」

ナギ「じゃあ、決まり！」

レーネ「はい！お兄ちゃんの手料理楽しみにしています！」

その後、おしゃべりをしながら、ご飯を食べた。

## 牡牛座のメイド part 2 (後書き)

2人目のピュアハーツ。

牡牛座のメイド、カウラが登場しました。

擬人化が出てくる小説ではメイドがよく出ています。

彼女の身長は、美咲<カウラ<イズ、となります。

この調子で、増やそうと思っていますが、カオスにならないようにしていきます。

誤字脱字、感想、意見、アドバイスなどがありましたら、どうぞよろしく願います。

子の少女 part 1 (前書き)

ナギのクラスメイトが来ます。

## 子の少女 part 1

昼飯を終えて、片づけをしようとする、レーネ達がやるつと言つて後片付けを任せることになった。やる事がなくなったナギはとりあえず、自分の部屋に行つて、私服に着替えて、またリビングに戻つて行つた。リビングの奥の部屋が台所になっていて、そこから食器を洗う音が聞こえてくる。

やる事がなくなったナギは、中央に設置してあるソファアームに座つてボーっとしていた。正面にはテレビが置いてあるが、特に見たい番組がない。

ナギ「やる事がないと、暇だな」

ピンポン。

しばらくしていると、玄関のチャイムが鳴つた。

ナギ「はい。今行きます」

廊下に出て、玄関のドアを開けると、そこには二つの鞆を持った、幼馴染のあかりが立っていた。

あかり「おまたせ。ナギ」

ナギ「やあ、あかり。来たつてことは、休校になったの？」

あかり「うん。まあアークジェレイドの技術なら今日と明日で復興が終わつて、明後日には学校ね。はい、かばん」

ナギ「あ。ありがとう。届けに来てくれて」

あかり「お礼はいいわよ、幼馴染なんだから。……そういえば、あの子は？」

ナギ「レーネのこと？台所にいるよ」

あかり「ふーん。じゃあ、上がらせてもらっね」

そう言つて、あかりは靴を脱いで玄関に上がった。二人で廊下を歩くと、またチャイムが鳴った。

ナギ「あかりは先に入つて」

あかりは頷いて、奥に入った。ナギは玄関に戻り、ドアを開けた。するとそこには親友の有樹が鞆を担いで立っていた。

有樹「よっ」

ナギ「あれ？有樹。どうしたの？」

有樹「いや、帰っても別に大したことがなくてさ。久しぶりに遊びに行こうと思つてさ」

ナギ「そうなんだ。じゃあ、上がつて」

有樹「おう、おじゃましますっつと」

靴と脱ぎ捨てると、あかりの靴が視界に入った。

有樹「あかり、来てるのか？」

ナギ「うん」

有樹「そう、か」

有樹は玄関に上がり、中に入った。玄関に立っていたナギはドアを閉めようとした時、外に人の気配を感じた。辺りを見渡すと、塀のそばでこちらをちらちら見ている人の影が見え隠れしていた。

ナギ「あの、どちら様ですか？」

ナギがそう言うと、塀に隠れた人が姿を現した。しかし一人ではなく二人だった。一人は長身でイケメンの小泉イズ。もう一人は無口で小柄な少年の仔馬ムツキ。

イズ「いやー、星雲君。奇遇だね」

ムツキ「(コクコク)」

ナギ「奇遇も何も、なんで教えてないのに僕の家を知ってるの？」

イズ「いや、それは……(言えない！坂本君の後を追って行けば、もしかしたら星雲君の家に着くかもしれないなんて口が裂けても言えない！)」

ナギ「？」

ムツキ「……俺は、お前のピュアハーツを知りたくて来た。しかし、家がわからなかったから、坂本の後を追った」

ナギ「……要するに、レーネのことが知りたくてここに来たんでしょ？そのカメラに収めるために」

ムツキ「……うん。それにあんな美少女がお前のピュアハーツなら、俺はお前の友達になる」

ナギ「……」

イズ「とりあえず、上がらせて貰っても良いかな？立ち話もなんだから」

ナギ「そうだね。じゃあ、入っていいよ」

イズ「おじゃまします」

ムツキ「……同じく」

二人が中に入った。

ナギ「とんでもない人まで、来てしまったかな……」

ナギも中に入ろうとすると、足下で何かが引つ張っている感触を感じた。

下に目をやると、そこには綺麗な灰色の毛並みに大きな耳に長いしっぽが特徴のネズミがナギのズボンを掴んでいた。それにそのネズミはしっぽにはリボンがついていた。

ナギはしゃがんで目を合わせた。

ナギ「また、来たの？」

ネズミ「チュー」

ネズミはそう答えた。このネズミは前にもここにきてナギからえさをもらっていた。

ナギ「じゃあ乗って。えさあげるから」

ネズミ「チュ！」

両手を重ねてネズミの前に持っていくと、ネズミはぴょんっと飛んでナギの手のひらの上に乗った。

ナギ「よし、行こうか」

ナギは中に入って、みんながいるリビングに向かった。

## 子の少女 part 1 (後書き)

今回はここまでです。

この物語は1日に4人のピュアハーツを出そうという計画にしています。

次回も擬人が出ます。

しかし、今週から実家に帰る予定になっていますので、実家に着いたら、パソコンに繋がるかわかりませんが、期待してください。

誤字脱字、感想、意見などがありましたらよろしく願います。

子の少女 part 2 (前書き)

お久しぶりです。

今作は実家のパソコンから投稿しました。  
ご覧ください。

## 子の少女 part 2

ネズミを連れてリビングに入ると、そこにいた人たちの反応は様々だった。

レーネはイズに絡まれて会話をしている、カウラは人数分の水が入ったグラスを配っていて、あかりは珍しそうな目でカウラを見ていて、その隣に有樹があかりの横に黙って座っていて、ムツキがカメラを持って、レーネとカウラの姿を交互に撮っていた。

あかり「ねえ、ナギ」

あかりが部屋に入ってきたナギに気づいて声をかけた。

あかり「あのメイドさんって誰？もしかして、あんたの屋敷から派遣された人？」

ナギ「えっと、あの人はカウラ。ピュアハーツだよ」

有樹「マジかよ！確かにあの人には牛の角が生えてるし……」

イズ「ですね。しかし、僕はありだと思いますよ」

ナギ「そう……かな？」

有樹「なあ、なんでお前のピュアハーツは人の姿をしているんだ？」

あかり「そうそう、私も気になってた」

イズ「確かにそうですね。今まで生まれてきたピュアハーツは動物、

精霊、植物、マシンなどの姿となって生まれてきたと、記録にあります。しかし、星雲君のピュアハーツは今まで存在していなかった人として生まれてきた。これはピュアハーツが生まれて初な事です。星雲君、なぜ、あなたは人型のピュアハーツを生み出すことが出来たのですか？」

ナギ「そんな事言われても、僕にはわからないよ」

イズ「いえ、すみません。あまりにも珍しかったのでつい……。それにしても、あの二人がピュアハーツとは、勿体無い。仔馬君もそう思いませんか？」

ムツキ「……関係ない。相手が人だろうとピュアハーツだろうと、そこに美少女の姿がある限り、俺は写真を撮り続ける」

ナ・あ・ゆ・イ「（なんだろう、無駄にかっこいい）」

ナギ「ちょっと、席をはずすよ」

あかり「あれ？どこに行くの？」

台所に向かうナギにあかりは声をかけた。

ナギ「台所。この子にご飯をあげないといけないから」

そう言つて、あかりに手の上に乗っているネズミを見せた。

ネズミ「チュ？」

あかり「ひっ！」

すると、あかりは青ざめ、後ろに退いた。

あかり「ちよちよちよちよ、ナギ！あんななんてものを持ってきてるのよ！」

ナギ「何って、野良ピュアハーツだよ？」

カウラ「野良？」

レーネ「お兄ちゃん、野良って？」

レーネとカウラは『野良』という言葉が気になってやってきた。

ナギ「野良って言うのは、その言葉どおり、主に捨てられたことを意味するんだよ」

レーネ「ひどいです。せつかくタマゴから生まれたのに捨てるなんて……」

ナギ「うん、それもああるね。でも、その主が亡くなっても野良になるよ。ピュアハーツは大きく分けて二つの分類に分かれる。人から生まれたピュアハーツと自然の中から生まれるピュアハーツに分かれる。自然から生まれたピュアハーツは問題ないけど、人から生まれたピュアハーツが主を失って野良になると、しばらくしたら凶暴なモンスター化して人を襲うことになる」

イズ「僕もそれを聞いたことがあります。そのピュアハーツが闇に染まったとき、凶暴化し、人を襲う。そういうことが新聞やニュースにも載っています」

あかり「前までは、そのピュアハーツを出さないためにアークジェレイドが保護をやってたんだけどよ、最近ではデスイーターの数が増えちゃって、それどころではなくなつたの。そのため保護はなくなつて、野良ピュアハーツをデスイーターと同じように討伐になつたの」

有樹「だからな。ナギはそんなやつらを救うため、個人で保護活動をしたつてことだ。でか、飼っている訳じゃなくて、腹が減つたやつが来ればえさをやつたり、くつろがせて、後はフリーに出歩いているわけだ。……あかり、そこにいないでお前も来いよ」

あかり「むむむ無理よ！私はネズミが苦手なの知ってるでしょ！」

あかりは、人3人分離れた位置でビクビクしながら立っていた。

レーネ「優しいんですね。お兄ちゃん」

カウラ「とても立派です！私はあなた様のピュアハーツになれて本当に嬉しいです！あなた様の優しさに答えて、このカウラ、一生あなたについて行きます！」

レーネ「私も！」

ナギ「ありがとう。レーネ、カウラ」

その後、台所から固形のチーズを持ってきて、適当な場所に座つて、ネズミにチーズを与えた。  
ネズミは喜んで、かぶりついた。

ナギ「おいしい？」

ネズミ「チュー！」

ネズミは嬉しそうに答えた。

有樹「それにしてもよく食うな」

ナギ「うん。初めて来た時、チーズ丸ごと一個食べるんだ」

満腹になって仰向けになったネズミの腹を優しく撫でた。すると突然、ネズミの体が光りだした。

ナギ「え？え！何これ！？」

あかり「何が起こるの！？」

子の少女 part 2 (後書き)

途中で終わってすみません。

前回のあとがきで擬人を出すつもりだったのですが、先延ばしになってしまいました、まことにすみません。

誤字脱字、感想、意見などがありましたらよろしくお願いします。

子の少女 part3 (前書き)

更新が遅れました。

## 子の少女 part 3

ネズミがその光に包まれ、だんだん大きく膨れ上がり、片手では抱えられない大きさになっていた。

ナギ「な、何が、起こるの!？」

光が消えると、そこにネズミの姿はなく、代わりに小柄な少女がナギの腕に抱えられていた。

ナギ「一体何が……、それにこの子は……」

すると、少女は目を開き、自分の手を見た。どうやら自分でも何が起こったのか理解できていないらしい。その少女は今度はナギの顔を見つめた。

ナギ「えつと……」

戸惑うナギに対して、少女は床に降りて、改めてナギを見つめた。

少女「今まで、ご飯を食べさせてくれてありがとうございます!先輩!」

少女は元気のいい声でそう言った。

身長は中学生ぐらいで、白い制服と赤いスカーフに黒のミニスカート。のセーラー服を着ていた。

顔は子供らしく、くりんとした目。

髪は灰色で小さめのツインテール。

それにはないネズミみたいな耳と長い尻尾が生えていた。

ナギ「せ、先輩って……。それに君は？」

少女「あ、そうでした。この姿だとわかりませんよね？私は先輩にお世話になったあのネズミです。ほら」

そう言つて、少女は自分の尻尾をつかみナギに見せた。その尻尾には見覚えのあるリボンが結んでいた。

ナギ「じゃあ、君は、あのネズミなの？」

少女「はい！行き倒れになっていたところを先輩に助けて貰つて嬉しかったです！それにこの姿にしてくれて本当に先輩はいい人です！だからボクを先輩のピュアハーツにしてください！」

ナギ「え？」

あかり「ねえ、ナギ？これってどういうこと？」

後ろからあかりの手が肩に乗った。その手には微妙に力が入って、肩がもぎ取れそうだった。

ナギ「僕にも分かりません！」

イズ「しかし、今の現象を見ると、ネズミのピュアハーツが擬人化したということですね。そうなると星雲君を主として認めたピュアハーツは擬人化して人の姿となるということですね」

有樹「なるほど。けど、さっきのネズミはもともと他人のピュアハーツだろ？なんでそんなことができるんだ？」

イズ「そうですね。親から捨てられたピュアハーツはしばらくしたら魔物化してしまいますが、他人がそのピュアハーツを拾って大切にしてあげると、そのピュアハーツは欠けた思いがうまって、姿を変えると聞いたことがあります」

有樹「ん〜、難しすぎてよくわかんねえ」

イズ「ですね。ピュアハーツには謎が多いですし。それにしてもやっぱり可愛いですね〜」

ムツキ「（コクコク）」

イズは顔がにやけ、ムツキはカメラでさまざまな角度で少女を撮った。

少女「と、言うわけでよろしくお願いします！早速ですけど、ボクに名前を付けてくれませんか？本当はボクには名前がありますが、今は先輩がボクの主なので、名前を付けてください」

ナギ「名前か……そうだなあ、う〜ん……コトネ、でどうかな？」

コトネ「コトネ……ありがとうございます！名前をつけてくれて！先輩大好きです！」

コトネが腕を広げ、飛びついた。

ナギはその胸の中に抱かれた。

ナギ「!？」

レーネ「あーっ！！」

最初に声をあげたのはレーネだった。

ナギ「あの、離れてくれないかな？」

無駄な抵抗だと思い、言ってみたナギ。しかし

コトネ「やです 先輩の手にはもう乗れませんから、今度からはこうします！」

ナギ「えー……」

レーネ「ちょっと、ずるいです！私も！」

そう言ったレーネはナギの後ろに抱きついた。

二人に抱きつかれたナギは頭に二人の胸が当たって、呼吸がしにくい状態になっていた。

助けを求めようと、隙間からカウラを向いたが、カウラは羨ましそうにこちらを見ていた。

ナギ「……」

レーネ「お兄ちゃん大好き」

コトネ「ボクも好きです！」

その光景を忘れられている人間の三人は見ていた。

有樹「なんていうか、羨ましい気分だぜ……」

イズ「ですね。僕なんか、まだ好きな人ができていませんし」

ムツキ「……（コクコク）」

あかり「あー！もう！いつまでいちゃいちゃしてるのよ！さっさとナギから離れなさいよ！」

あかり一人、ナギを助けるため動き出した。

家の中の出来事をナギが帰ってきてから、今の状況の始終を近くに立っている電柱の上に立っている人物が見ていた。

その者は耳に機械的なアンテナが付いて、黒いコートを着たトラブル。彼女は主であるカンナの命令でナギを監視するように言われている。

その彼女は、コートのポケットから携帯電話を取り出し、アンテナに当てた。

トラブル「こちら、トラブルです」

カンナ「そつちどう？なんか凄いことが起こった？」

電話の向こうのカンナはそう答えた。

トラブル「はい。自宅に戻った後、新たなピュアハーツが生まれ、数時間後、親を失った一匹のネズミのピュアハーツが少年に接触し擬人化しました」

カナナ『ほう！』

トラベル「引き続き監視を続けますか？」

カナナ『そうして頂戴。もう少しで出られるから。じゃ』

カナナから電話を切った。

トラベルは検体電話をアンテナから離してポケットに入れて、**監査**を続けた。

### 子の少女 part3 (後書き)

子の擬人ピュアハーツ、コトネが出ました。

名前についてですが、私にネーミングセンスがないのは百も承知です。

コトネの身長はこれくらいです。

ナギくコトネくムツキ。

今回はナギがある場所に出かけます。お楽しみに。

誤字脱字、感想、意見などがありましたらよろしく願います。

丑の少女 part 1 (前書き)

今回はいつもより長く掛けました。  
ご覧ください。

## 丑の少女 part 1

それから時が経ち、新たに現れたコトネを囲んで会話をした。

コトネの前の親は職人で、一軒の店をやっていた。だが、その人は不幸な事故で亡くなって、ナギに拾われたという。

他にも色々な事を聞いて、あかり達は帰った行った。

それからしばらくリビングで休んでいたナギは立ち上がって、台所に置いてある冷蔵庫から野菜や果物を袋に詰め、玄関に向かった。

カウラ「ナギ様、どちらへ？」

靴を履いていると、後ろからカウラがそう言ってきた。振り向くとカウラの他にもレーネとコトネもいた。

ナギ「うん。これからここから離れた場所にいる野良ピュアハーツの所に行くんだ」

カウラ「また、野良ですか？」

ナギ「うん。でもそのこは、ここまで来られないから、僕が行かないといけないんだ」

レーネ「それでしたら、私も一緒に行ってもいいですか？」

コトネ「ボクも！」

ナギ「ごめんね。あの子はとても血の気が荒いんだ。だから、僕ひとりじゃないとダメなんだ」

レーネ「そうなんですか？」

ナギ「うん。そろそろ行かないと、遅れるとあの子暴れだすから。この前、重量車のトラックを軽くひっくりかえしたことがあったから」

コトネ「どんなピュアハーツですか……」

ナギ「じゃあ行ってくるよ」

コトネの疑問をよそに、ナギは玄関のドアに手を付けた。

レーネ・カウラ・コトネ「いつてらっしゃい」

後ろから「いつてらっしゃい」と聞こえたナギは後ろに振り向いた。そこには笑顔で見送ってくれる三人がいた。

レーネ「どうしました？」

レーネが首を傾け向けてそう言った。

ナギ「い、いやなんでもないよ。じゃあ、行ってきます」

ナギは外に出て、ドアを閉めた。

外に出たナギはドアに背を付け寄り掛かった。

ナギ「いつてらっしゃい、か……懐かしいな」

口が緩んだナギはそう言って、目的地に向かって走り出した。

電柱の上に立っていたトラベルはナギが外に出たのを確認し、携帯電話を取り出し、アンテナに付けた。

トラベル「こちらトラベル。ターゲットの少年が外に出ました。

トラベルは電話の向こうにいるカンナに電話をした。

カンナ「ええ〜、外に出たの！？この変装はこう見えて、動くの大変なんだから〜」

トラベル「迎えに行きましょうか？」

カンナ「ん〜、じゃあお願いしようかな。少年が見失わないように小型偵察機を使って」

トラベル「了解しました。では迎えに行きます」

カンナ「うん。お願い」

そう言っただけでカンナから電話を切った。

トラベルは携帯電話をしまい、代わりに別のところからプロペラがついた小型偵察機を取り出し、スイッチを入れ、少年の後を追わせ

た。そのあと、トラベルは電柱から飛び上がり、屋根から屋根へと移り飛び、カンナを迎えに行った。

歩いて走ってを繰り返して30分程度、ナギは町から離れた廃棄された大きな倉庫に辿り着いた。

見渡す限り、石や岩がごろごろ転がっており、忘れられた作業道具が放置され、もう使われなくなった錆ついた線路が敷かれたいた。

ナギはそのまま歩き、開いたままの倉庫の扉の前に来た。

ナギ「よし、問題なし。では」

辺りを見渡し確認したら、早速中に入って行った。

中は暗いが、窓から少量の光が入ってきて、少しは明るい。

そこにも放置された壊れた機械がごろごろと無造作に放置されていた。

ナギ「おーい！僕だよ！出ておいでー！」

ナギは奥に向かって、声を出した。

その時、大地が一瞬揺れだした。そして奥から、ズドンツズドンツと、段々こちらにやってくる大きい足音が聞こえてきた。

ナギの方へやってきたそれは、トラックぐらいの大きさで、頭には大きくて太い角が生えた、巨大な牛の様な生き物が唸りながらこちらにやってきて、ナギの目の前で足を止めた。

ナギは何のためらいもなく、その生き物のそばにより、優しく顔を撫でた。

ナギ「よしよし、今日は大人しくしてくれたようだね。さあ、食べ物持ってきたよ」

ナギは持ってた袋を下にして、中に入っていた野菜類、果物類を出

した。

一歩後ろに下がると、その生き物は食べ始めた。

ナギ「それにしても、ずいぶん大きくなったね？出会った頃は普通の牛と同じくらいの大きさだったのに、今はこんなに大きくなって……」

ナギはそう言いながら、優しく撫でた。生き物は気にせず、食べ続けた。

すると、生き物は何か気配に気づいたように頭を上げ、唸り声を出し始めた。

ナギ「どうしたの？」

ナギが生き物が見ている方を向くと、出入り口の前に二人の影があった。

一人は腰が曲がっているようで小さく、もう一人は長身で頭の横から突起が出ていた。

その二人が、目の前で唸っている生き物を気にせず、ナギがいる方へ歩き出した。ナギの近くに來ると、その姿が分かった。

ナギ「あ、あなたは……」

？「お久しぶりですの〜」

そのうちの一人は、ナギが昨日公園で出会った叔母だった。その隣に立っている人は、耳に機械的なアンテナが付いたアンドロイド、トラブルだった。

ナギ「……どうして、ここへ？」

ナギは警戒して尋ねた。

ここは誰にも知られていない、ナギだけが知っている場所。それなのになぜ、おばがここに来たのか。そしてもう一つ、叔母はアークジエレイドの一人だ。学校でカイという男が『裏切った』と言っていたが、それでも何が目的でここまで来たのかわからない。

おば「ちよつと、お姿を見かけまして、興味半分で追ってきてみれば、これはこれは……」

おばはさつきから唸っている生き物を興味津々で見ている。

さつきから生き物は唸っているが、ナギを守るように前足を二人の間を挟んでいる。

おば「この巨大な牛のピュアハーツはなんですか？」

そう、叔母が尋ねてきた。

ナギ「この子は以前、ここの近くを探索していたときに見つけました。崖から落ちたようで怪我をしいてて、僕がこの倉庫に運んで手当をしました」

叔母「そうですか、それはそれは立派なことを……ところで、あのタマゴはどうなさいましたか？」

ナギ「はい。無事に二人も羽化しました」

叔母「ほお。これは良かったですねえ。他にもネズミがあなたを主として認め、人の姿になってましねえ」

ナギ「!どうしてそれを!」

後者のことを言われ、ナギは動揺した。

叔母「あら、つい口が滑ってしまいました。実は私のピュアハーツ、  
トラベルにあなたを監視するように頼んだのですよ」

そう言われて、隣にいるトラベルに目を向けた。トラベルは動揺も  
なくお辞儀した。

叔母「早速ですが、ご自宅にも寄らせてもよろしいですか?」

ナギ「あなたは……」

おば「君は気づいていると思うけど、私は元アーケジレイドの一  
員だって知ってるよね?」

おばの声と口調が変わった。

ナギは「あなたは、一体……」

ナギがそう言うと、叔母は服をカ一杯剥がした。すると、そこに立  
っていたのは黒いコートを纏い、眼鏡をかけた女性、星天治カンナ  
が立っていた。

ナギ「……」

カンナ「驚いた?これが私の本当の姿よ。改めて自己紹介。私の名  
は星天治カンナ。よろしくね」

ナギ「…星雲、ナギです……」

カンナ「星雲？もしかして、星雲静香の弟君ね？じゃあ弟君って呼ばせて貰うね」

ナギ「はあ…あの、なんで…」

カンナ「ああ、ごめんね。実を言うと私、アークジェレイドに狙われてるの」

ナギ「え？」

カンナ「まあ、色々あつたけど」

ナギ「そのいろいろって、なんですか？」

カンナ「まあ、その話は置いて、早速だけど、君のピュアハーツを見せてくれないかな？」

ナギ「え？」

カンナ「ねえねえいいでしょ。トラベルが録画した映像を見たけど、やっぱり実物が見たいのよ」

ナギ「……」

ナギはそばにいるピュアハーツに目を合わせた。すると、察したように二人の間にある前足をどかした。

ナギ「わかりました」

カンナ「ほんと！？やった！じゃあ、行こう今行こう早速行こう！」  
嬉しそうにそう言って、カンナがナギの手をとり、出口まで行こうとしたら、後ろから何か重い足音が聞こえてきた。足を止め、振り返ってみると、あのピュアハーツがこちらへ足を動かさず、ゆっくりとこちらに近づいてきた。

トラベル「やりますか？」

トラベルが手を突き出し、構えた。

ナギ「ちょっと、待ってください！」

ナギは手を離してもらって、トラベルの横を通り、ピュアハーツに寄り添った。

生き物は唸り声を出さず、代わりに甘えるような声を出した。

ナギ「何度も言ってるけど、君を連れて行くことができないんだよ。わかって」

しかし、ピュアハーツはその言葉に答えず、じっとナギを見つめていた。

ナギ「……ごめんね。僕だってこんな場所よりも、一緒に外の世界に連れて行ってあげたいよ。でも、君は僕のピュアハーツじゃないから……ごめん」

ナギはピュアハーツの頭に手を触れた。すると、そのピュアハーツの体が光りだした。

ナギ「！こ、これは……！」

カンナ「なんなのこれ！？」

その光は輝きを増した。

その輝きの強さにナギ達は目を塞いだ。

そして、新たな仲間が生まれる。

## 丑の少女 part 1 (後書き)

お疲れ様でした。

やっとナギとカンナが出会いました。

毎度のことながら駄文で申し訳ございません。

そして、次からは新たなピュアハーツが登場します。

ぜひ、楽しみにしてみてください。

誤字脱字、感想、意見などがありましたら、よろしくお願いします。

## 丑の少女 part 2

光が止んだのを目をゆっくり開いて見ると、そこにはあの大きな牛のピュアハーツがいなくなって、かわりにナギより背の高い中学生ぐらいの少女が手を腰に付け、仁王立ちで立って、こちらを見ていた。

その少女は白と黄色のウェイトレスのような服を着ていて、胸元には金属の胸当てに肩や腕、ブーツにも同じ金属武具が装着していた。長い髪を両方に結び縦ロールにして、幼さが残る顔立ちと哀調のある釣り上った目に、牛の角と肩と腰に生えていた。その少女がナギを見た瞬間……

少女「はははははははははは！ナギよ、何と間抜けな顔をしているのだ！」

ナギ「え？」

少女「まあよいのだ。私も驚いているのだ。このようになったのを説明を要求するのだ！」

ナギ「え？でも、僕もどうしてこうなったのか、わからないよ……」

少女「なんだ知らないのか。まあいいのだこうしてお主と話せることができて嬉しいのだ！ありがとうなのだ！」

ナギ「あ、うん……」

その少女にはやはり、笑顔が似合っていた。

少女「早速なのだが、私に名前を付けてくれなのだ！」

ナギ「え？でも、君には名前があつたんじゃ……」

すると、少女は悲しげな表情になり、俯いた。

少女「やめてほしいのだ。あんな奴にくれた名など名乗りたくもないのだ。これからはナギが私の主なのだ！名前を付けてくれなのだ！」

ナギ「そう……名前ね。これで三度目か……」

少女「三度目？」

ナギ「いいや、なんでもないよ。そうだなあ……」

ナギ「……マナミ、でどうかな？」

マナミ「うむ！良い名なのだ！それにナギが付けた名だ！大切にするのだ！」

ナギ「喜んで貰えて良かったよ」

その光景を存在が忘れられているカンナとトラベルは不思議なモノを見るかのように二人を見ていた。

カンナ「……今の、何が起こつたの？」

トラベル「解析不能。今までの記録にはあのような現象がありません

んでした。私も今まで遠くから見えていましたが、結果が不明です」  
カナナ「そう。でも、ますます彼に興味が湧いたわ。それにあの子と一緒なら面白いことがあるそうね」

カナナはまるで宝物を見つけたかのようにほほ笑んだ。

ナギ「あの〜」

カナナ「へ？」

カナナが今の表情になっていると、ナギ達が目の前に立っていた。

カナナ「あつ、えつ、こ、これは……」

カナナは慌てて、いつもの表情に戻し、口元についているよだれをふき取った。

カナナ「もういいの？」

ナギ「はい。マナミを連れて僕の家に行きます」

マナミ「ナギよ！本当なのか！？」

ナギ「うん」

マナミ「やったのだ！これですつとナギと暮らせるのだ！」

マナミは嬉しくて、その場ではねた。

そして、4人は倉庫の外へ出た。

すると、目の前に真っ赤な夕日が沈みかけていた。

マナミ「うわあ、久しぶりの外は眩しいのだ」

カンナ「それじゃあ、行きましょう。いざ！弟君の家へ！」

カンナが先頭に立ち指を前に突き出して、歩き出した。

マナミ「……ナギよ。ちょっと待ってほしいのだ」

歩き始めると、マナミがナギを呼び止めた。

ナギは立ち止り、マナミに振り向いた。

同時に先頭を歩いていたカンナとトラベルも振り向いた。

ナギ「どうしたの？」

ナギが尋ねると、マナミは無言で俯いたまま、左腕の籠手を外し、露出した左手をゆっくりとナギに差し出した。

ナギ「？」

ナギはどうして手を差し出されたのかわからない。

マナミ「……手、繋いで、欲しいのだ」

ナギ「あ、うん。いいよ」

ナギはマナミの言っていることに理解して、なんのためらいなく差し出された彼女の手を握った。

マナミ「……ナギの手、柔らかくて暖かいのだ」

ナギ「そうかな？マナミの手だって柔らかいよ？」

マナミ「……実を言うとな。私はナギと会おう前は、前の主が好きだったのだ。だが、あいつは力の欲しさに目がくらみ、もっと強い奴を見つけようと、私をあつ崖から突き落としたのだ。それから、私は人間を憎むようになったのだ。だが、怪我をして動けなくなった私にはどうすることもできなかったのだ。」

ナギ「……そんなことが、あつたんだ」

マナミ「そんな時、お主が来てくれたのだ。最初は人間であるお主を嫌っていたのだ。そんな私の気持ちを無視してお主はあの倉庫へ私を連れていき、看病してくれたのだ。それ以来、お主は毎日私の元へ来て、世話と看病をしてくれた。雨の日も風の日も雪の日も私は毎日、お主が来るのが楽しみになったのだ。だから、私はお主のことをあいつよりも好きになったのだ。ずっと一緒にいたいと思っただのだ」

ナギ「マナミ……」

マナミ「ナギよ。今までありがとうなのだ。これからはナギのために生きよう。よろしく頼むのだ」

ナギ「うん。これからもよろしくね」

二人の絆がさらに強くなった瞬間だった。

カンナ「また私達、忘れられてるよ」

トラベル「そうですね。しかし、人間とピュアハーツの絆を改めて感じる事ができました」

カンナ「ん〜、そうだよ〜。ねえ、トラベル。私達も手を繋ぐ  
う」

トラベル「いいですよ」

カンナはトラベルの手を握った。しかし、トラベルの手は冷たく、触ったカンナは冷たさを感じた。

カンナ「やっぱり、トラベルの手って冷たいね」

トラベル「当たり前じゃないですか？私はアンドロイド型ピュアハ  
ーツなんですから」

カンナ「そうだよねえ」

ナギ「あの、カンナさん」

カンナの近くに來たナギ達は声をかけた。

カンナ「あ、そうだった。じゃあ行くかうか」

マナミ「うむ！ナギの家に行くのは楽しみなのだ！」

カンナ「一体何があるのかなあ〜」

トラブル「楽しみですね」

ナギ「いや、何も無いって言うか、あるというか……」

ナギがそう小さくつぶやくが、四人はナギの家に向かって行った。

## 丑の少女 part 2 (後書き)

丑の擬人ピュアハーツ、マナミが登場しました。  
彼女に身長はこれくらいです。

ナギくコトネ＝マナミくムツキ  
となります。

ナギ「あの、作者さん」

あら？ナギ君。どうしました？

ナギ「この小説の登場人物の中で僕が一番小さいキャラってことになっ  
ているんですか？」

はい。そうすよ？

ナギ「できれば、僕よりも小さいキャラを……」

却下。

ナギ「ええ！？」

ナギ君はそのままでもいいのです！私は君の様なシヨタな主人公が魅力的な  
ハーレムを知らぬうちに作っていくのが好きなんです！

ナギ「そ、そんなハーレムだなんて……」

これは決定事項です。

ナギ「そんな……」

と、邪魔が入りましたが、誤字脱字、感想、意見などがありましたらよろしく願います。  
それではまたの次回を

ナギ「僕はどうすれば……」

カナナ「弟君、どうしたの？」

トラベル「マスター。コンビニがありますよ？」

マナミ「コンビニとはなんなのだ？」

それでは次回！

## 黒き使者 白き使者

そこは光すら入ってこない暗い場所。そこにもう使えなくなった廃棄された古い教会があった。

その教会は西洋式で結婚式を上げる建物みたいだが、壁が汚れ、はめてあった全ての窓が割れ、錆づいていた。

その中は薄暗い空間で、雑に並べられた横長のイスと、椅子と椅子の間にはボロボロになった絨毯が入口から祭壇まで敷かれ、祭壇の中央には錆ついた大きな十字架が祭られていた。

その十字架を、一人の人物が頭を上にして眺めていた。他にも教会内では合計13人の者達がかつろいでいた。

教会内にいた人物達は皆、黒いコートを着て、頭を覆うフードで顔を隠していた。

「やられたようだな！」

椅子に座ってゲームをしている右胸に雷のエンブレムを付けた者が近くで座っている者に話しかけてきた。

「うるせえ！もともとはあのデスイーターが弱かったただけだろう！」

話しかけられた炎のエンブレムを付けた者は手に持った瓶を叩きつけ、怒鳴り返した。

「デスイーター強さは人間の闇の心によって変わる。つまり、あの取り込んだ人間の悪しき心が弱かったから負けたんだ！」

「それは言い訳ですか？」

そこへ、氷のエンブレムを付けた者が読んでた本を閉じ、炎のエンブレムの者に尋ねた。

「あたりまえだ！そうじゃなかったらあんな奴に……！」

「そうだねえ、確かにあの変な奴が現れなかったら、あのアークジエレイドの幹部の一人が来る前に、もっと人間の心を集められたかもしれないね。」

「てめえ、それは俺がアークジエレイドの奴らに負けるとでも？」

「おやめなさい。今は仲間割れをしている時ではありません。」

「ミーもそのピュアハーツについて気になっていました。人の姿であれほどの力を出せるとは……。ただでさえ、アークジエレイドだけでも目障りだというのに。」

そこへ、三角フラスコのエンブレムを付けた者が3人のところへやってきた。

「ええ、これは調べなければなりません。一体奴は何者なのでしょうか？」

「ねえ？オメガはこのことをどう思う？」

近くで話を聞いていた水のエンブレムを付けた者が、錆びた十字架を見上げるオメガと呼ばれた者に声をかけた。

すると、のエンブレムを付けたオメガは反応したようにゆっくりと12人のいる方に振り向いた。

すると、今まで騒いでいた空間が一瞬で静まった。

オメガ「確かに、あのピュアハーツが現れたことは厄介だ。これからの人間から心を奪うことが難しくなる。だが、誰も我らの邪魔をすることはできない！いいか！再び我らの目的を宣言しよう！我らは人間から心を奪い、そして心を捧げ、始まりの聖地『レイディアントガーデン』への道を開く！全てはあの方のために！！」

「『』」全てはあの方のために！！」「」「」

オメガの宣言に続き、その場にいる12人が声を揃えた。  
響く教会の中、オメガは再び、十字架を見上げた。

オメガ「待っていてください……。あなたが見たかったあの聖地を……我らの手で叶えましょう……！」

オメガは十字架に向かって、誓った。

そこは、街を見渡せる高い場所。

その一室で一人の男が街を見下ろしていた。

部屋は広く、窓の近くに高級な椅子と机、その隣には観葉植物。正面の壁には大型のモニター。右の壁には本棚と埋め尽くす本が置いてあった。

そこへ、部下とも言える白い制服を着た男が入ってきた。

部下「失礼します。総司令、大変です。」

総司令と言われた男はゆっくりと入ってきた男に振り向いた。

総司令「なんだね？」

部下は敬礼をして、言葉をつづけた。

部下「はっ！黄童カイから連絡があり、聖天高校に蜘蛛型のデスイーターが現れました」

総司令「ほう、またか。それでどうなった？討伐はできたか？」

部下「……それが、討伐したのはその学校に一般生徒のピュアハーツですが、そのピュアハーツが奇妙な姿をしていて……」

総司令「奇妙な姿？」

部下の話を聞いていた総司令は、その言葉を聞いて、目を開いた。

部下「はい。そのピュアハーツの姿は少女の姿をして、デスイーターと戦い、そして、今まで不可能だった取り込まれた人の救出に成功していました」

総司令「なんと！それは誠か！？」

部下「いえ、そこはまだわかりません。当事者はその場にいた一般生徒達と黄童カイだけです」

総司令「なるほど……」

総司令は再び、窓の外の風景を眺めた。

総司令「フ、フ、フ……、なるほどな、一般人がか……。君」

部下「はっ！」

総司令「聖天高校は今どんな状態だ？」

部下「え？あ、ただ復興中です。復興に二日程かかると」

総司令「そうか……。今すぐ討伐に出ている全ての隊員に伝えたい。聖天高校が復興と同時にアークジェイド隊員を編入しろと」

部下「はっ！」

部下は敬礼し、踵を返して扉を開け、お辞儀して部屋を出た。

総司令「始まる……。この世の物語が今、始まる……。！」

総司令は、窓越しに見える夕陽に手を伸ばし、掴むように握った。

黒き使者 白き使者（後書き）

あかり「ねえ、作者」

あら、今日はあかりさんですか？

あかり「今回の文なんだけど、これ明らかに駄文ね」

……やっぱりそう見えますか？

あかり「うん。でもさ、登場人物だからわかるけど、この小説を読んでくれている読者の方に伝わると思う？」

……

あかり「はあ、さて、こんな作者は置いといて、誤字脱字、感想、意見、作者へのダメ出しがあればどうぞ、よろしくお願いします！  
それでは」

ちよっと！何勝手に進んでるんですか！

あかり「あつ、次の話はあのカンナって言う人がついにナギの家に  
来るよ。たのしみにしてなさい！」

あつ！私の次回予告が……！！

“おかえりなさい”と言ってくる者(前書き)

皆さま、お久しぶりです。

駄文になっているかもしれませんが、どうぞお読みください。

“おかえりなさい”と言ってくる者

夕刻。ナギ達は話をしながら家に向かった。  
途中、どこかに出かけるのか隣のおばさん、宝塚時子が向こうからやってきた。

時子「あら、ナギ君」

ナギ「こんばんわ。おばさん」

時子「こんな時間になるまでどこに行ってたの？それにその人たちは？」

時子の視線がナギのそばにいる三人に向いた。

カンナ「こんばんわ。私は星天治カンナと言います。こっちは私のピュアハーツ、トラベルです」

トラベル「トラベルです。よろしくお願いします」

マナミ「私はマナミなのだ！今日からナギの……」

ナギ「ちょっと、マナミ！」

ナギは慌てて、マナミの口に手を当てた。なぜならこのことをあまり知られてはいけないと思ったからだ。

マナミ「んっ、んっ……！」

時子「？」

ナギ「この子は、今日知りあって、僕の家招待したんです！」

時子「そうなの、で、あなた隊は？」

カンナ「私達は……えっと……」

カンナが言い訳を考えていると。

時子「ふふ。悪い人ではないわね。私はナギ君の向いの家に住んでいる、宝塚時子です」

カンナ「あ、こちらこそ。……ん？」

時子「じゃ、私はこれから集まりがあるか。またね、ナギ君」

ナギ「はい。お気を付けて」

時子は笑って、ナギ達の横を通り、向こうへ行った。

カンナ「宝塚……」

ナギ「あの、どうかしました？」

カンナ「ん？ああ、いや、なんでもない。（気のせい……だよな？）」

マナミ「ん〜！ん〜！〜！」

ナギ「あ、ごめん」

忘れていたマナミに気付き、口から手を離した。

マナミ「ナギよ！いきなり何するのだ！」

ナギ「だって、マナミが変なことを言うと思ったから」

マナミ「む！私はあの時、ナギのピュアハーツなのだと言おうとしたのだ」

ナギ「それが変なことなんだよ。いい？もし、そのことを時子さんに言ったら、僕がどんな目で見られると思う？」

マナミ「む、確かに。ナギが変な眼で見られるのは私は堪えられないのだ」

ナギ「そうだよ。だから、そう言うのは一般の人に言っちゃいけないからね」

マナミ「わかったのだ」

ナギ「うん。じゃあ行こうか」

再び、ナギ達は歩き出した。

しばらく歩いていると、無事に家に辿り着いた。  
初めて来たナギ以外の三人は家を見上げていた。

カンナ「ずいぶん大きな家だね」

カンナが思わず呟いた。

トラベル「はい。私達が暮らしていた建物と比べて綺麗ですね」

ナギ「いや、そこまで綺麗じゃないけど。さあ、どうぞ中へ」

マナミ「うむ。早速お邪魔するのだ!」

ナギは皆を連れ、玄関の前に立ち、ドアを開けた。すると……

「おかえりなさい」

玄関を開けるとそこに、カウラとエプロンを付けたレーネとコトネが立っていて、迎えてくれた。

「た、ただいま……」

ナギは『おかえりなさい』と言われて、驚いたが、嬉しくもあつた。ナギがこの家に移り住んで、しばらく迎えてくれる人がいなくて寂しかったからだ。

レーネ「あれ？お兄ちゃん。その人達は？」

レーネがナギの後ろにいる三人に気付いた。

ナギ「そうだった、紹介するね。この子は……」

ナギが紹介する前にマナミが前に出て、手を腰につけ胸を張って

マナミ「私の名はマナミ。先程、この姿になってナギのピュアハーツになつたのだ！よろしくなのだ」

コトネ「えー！！と言つことは、マナミさんもボクと同じ野良だったんですか？」

マナミ「む？お主も野良だったのか？」

コトネ「はい！ボクはネズミのコトネです。それと、こちらの二人は先輩から生まれたピュアハーツです」

レーネ「レーネです。よろしくお願ひしますね」

カウラ「カウラと申します。その角を見てあなたも牛のようですね？同じ牛同士仲良くしましょう」

マナミ「うむ！皆の者、よろしくなのだ！」

三人はマナミを受け入れ、マナミもすっかりみんなの輪に入った。

カンナ「あのさ、いい加減に私を忘れないでほしいんだけど？」

ナギ「あ、ごめんなさい」

カンナはやれやれといった感じで前に出た。

レーネ達もカンナに気付き、会話をいったん停止し、カンナに向き合った。

カンナ「私の名前はカンナ。そして私のピュアハーツのトラベルだ」

トラベル「トラベルです。よろしく願います」

カナナ「それにしても、見事な姿ね〜〜かわいいな〜〜羨ましいな〜〜」

カナナが4人のピュアハーツを興味深い目で見ていると

トラベル「マスター。私では不安ですか？」

カナナ「いや、そんなことないよ〜、もしかして妬いてんの〜？」

カナナが公衆の面前でトラベルに抱き、頬擦りするが

トラベル「いえ、妬いていません」

トラベルは無表情でそう言った。

ナギ「あの、玄関で立ち話もなんですから、中に入りませんか？」

そう言つて、ナギ達は玄関から上がり、リビングに入った。

カナナ「へえ〜、結構綺麗だな〜。あ！ソファーだ！とっつ！」

リビングに入ると、カナナは部屋を見渡し、ソファーを見つけ、そこに飛び込んだ。

カナナ「ん〜、この感じ久しぶり〜ふかふかだ〜」

カナナは嬉しそうに、寝ころび、そばにあったクッションを抱き、顔を埋めていた。

トラベル「申し訳ありません。ナギ様。マスターが遠慮がなくて」

ナギ「いいんですよ。気にしないでください。それより、お茶を出しますね」

カウラ「ナギ様。お茶は私が準備します」

ナギ「うん、わかった。でも、火の扱いに気を付けてね」

カウラ「はい」

カウラは台所に入って行った。

残されたナギ達はカンナのいる場所に向かい、ナギはソファを独占しているカンナの向かいのテーブルを挟んだ場所に座り、右にレィネ、左にコトネ、マナミが座り、トラベルはカンナのいるソファの後ろに立った。

カンナ「さて、じゃあ、本題に入ろうか」

カンナが十分堪能して、座りなおし、ナギと向かい合った。

カンナ「まず最初に言うけど、ピュアハーツは決して人間の姿になつて生まれることはない。それは知っているわよね？」

ナギ「はい。それは知っています」

カンナ「でもね。今この家に、いえ、あなたのピュアハーツはどういう訳か人の姿となって生まれた。それは前代未聞なことなの」

ナギ「確かに、あの時は驚きました。でも、なんで……」

カンナ「それは私にもわからない。そもそもそのピュアハーツを生み出したのは君なんだから」

ナギ「そうですけど……」

カンナ「それに、コトネとマナミだってもとは別の主のピュアハーツなのに、君を主として認めたらこの人の姿になったのも前代未聞なの。それつまり、君には何か特別な力を持っているって仮定するわ」

ナギ「僕が？」

カンナ「話がずれるけど、君に渡したタマゴは、とある遺跡で発見した古代の記録を元にして作ったの。でもそれは並の人間じでは制御できない強力なピュアハーツなの。実験にそのタマゴを羽化させようとしたんだけど、そのタマゴを入れた人は数分でその体が弾けなくなったの。でも、タマゴは無事だったの」

ナギ「そんなに、危険なタマゴだったんですか？」

カンナの話聞いたナギは人がなくなつたと聞いて、震えだした。震えを落ち着かせようと、左右に座ってるレーネとコトネはそれぞれの手を握り、落ち着かせた。

ナギ「……」

ナギの両手に二人の手が握っているのに気付कि、交互に二人を見た。

ナギ「ありがとう」

ナギは二人に礼を言い、二人はほほ笑んだ。

ナギ「あの、続けてください」

カンナ「大丈夫かい？」

ナギ「はい」

カンナ「わかった。私はこれ以上実験を続けないために、タマゴを持ち出し、アークジェレイドを抜けた。その後、このタマゴをどう処理するか悩んで歩いていると、君がいた公園の前を通ったんだ。すると突然、タマゴが動いたんだ」

ナギ「動いた？」

カンナ「ああ。まるで、タマゴが主を見つけたって感じだった。それで公園を覗いてみると、そこには君がたった一人でベンチに座っていた。もしかしたら、君ならこのタマゴを制御ができるかもしれないって思ったわ。だから、私は一芝居うって君にタマゴを託した」

ナギ「芝居？じゃあ、あのお守りは……」

カンナ「ああ、あれ？普通に店に売ってる安いお守りよ」

ナギ「……」

カンナ「それにしても、そのうちの二体がこんなにも素晴らしい姿

となつて生まれ来るなんて!」

ナギ「あの、聞いてもいいですか?」

カンナ「なに?」

ナギ「もし、僕じゃないだれかが、そのタマゴを羽化することに成功したらどんな姿になって生まれるんですか」

カンナ「そうね・・・古代の記録によると、あのタマゴは星座を元に行っているらしいの。見たところレーネはおとめ座。カウラは牡牛座ってところね」

ナギ「はあ……………」

カンナ「私にとっては今後、どんな子が生まれて、どんな姿なのか楽しみだよ」

ナギ「……………」

カンナ「ところでさ、君は籠持ってる?ピュアハーツを持っているなら、籠が必要でしょ?」

ナギ「あ、いいえ。僕はもともとピュアハーツを持つ予定がなかったので、持ってないです」

カンナ「そう。じゃあ私の余ってる籠あげようか?」

ナギ「いいですか?」

カンナ「ええ。ちょっと待っててね」

カンナは懐から使っていない籠を取り出し、ナギに差し出した。

カンナ「はい。どうぞ」

ナギ「ありがとうございます」

ナギの手がその籠に触れると、突然、その籠が光り出した。

ナギ「え？これって……」

その光がさらに強くなり、辺りを光が包んだ。

ナギ「うわっ！」

ナギ達は眩しくて、目を塞いだ。

数秒経ち、光が収まるのを確認するため目を開くと、ナギの手に、さつき籠を触れた手に何かの重みを感じた。

ナギはゆっくりと視線をその手に向けて、驚いた。

ナギ「これは……！」

ナギの手に乗っていた物は……

“おかえりなさい”と言ってくる者（後書き）

最後の方は決して投稿失敗という訳ではありません。  
次回は異世界へ行き、バトルになります。

有樹「おい、あいつが異世界に旅立つのか？」

はい。そのつもりです。

有樹「ふざけるな！なんでナギばっか楽しいそうなことしやがって  
！それに比べて俺の出番が後半で全然出てねえじゃねえか！！」

それでは、誤字脱字、感想、意見などがありましたら、どうぞよろ  
しくお願いします。

それではまた、いつの日か。

有樹「無視すんな！！」

あかり「ちよつと、あんた！黙りなさいよ！！」

## 異空間の闘技場（前書き）

長らくお待たせしました。

やる気と根性などのいろいろなことがあって、投稿できませんでした。

## 異空間の闘技場

ナギが触れた籠が光りだし、全体を光で覆い、その光が消えると、ナギの手に籠が跡形もなく、代わりに謎の小型機械がその手に乗っていた。

ナギ「これは……」

その機械を良く見てみると、大きさは携帯電話くらいで、真ん中より上に長方形の画面があり、下には二重の円状のボタンと四つの小さなボタンがあった。

カンナ「え？なにそれ！？ちょっと貸して！」

ナギ「あっ……」

カンナはその機械に驚き、ナギから取り上げた。

カンナ「へえ、なんか、凄いな」

カンナはいろんな角度から眺め、初めてなのにボタンをつまみ操作して調べ始めた。

ナギ「あ、あの」

カンナ「ごめん。ちょっと、話しかけないで」

ナギ「はい……」

カンナが夢中で操作していると、台所に入っていたカウラが人数分のお茶を乗せたお盆を持ってこちらにやってきた。

カウラ「あの、ナギ様。さっき光が見えたのですが、何か起こりましたか？」

ナギ「うん、実は……」

ナギは今起きたことをカウラに説明した。

ナギ「……と、言う訳なんだ」

カウラ「なるほど、そういうことがあったんですね。なんとも不思議なこともありますね」

ナギ「うん、そうだね」

カウラ「ところで、さっきからマナミさんが落ち着きがないようですよ？」

ナギ「え？」

ナギが横を見ると、そこには落ち着きがなさそうに腕を組んで歩きまわっているマナミがいた。気になったナギが声をかけた。

ナギ「マナミ、どうしたの？」

声をかけると、マナミはナギに気づき、向かいあった。

マナミ「うむ、大したことはないのだが、なんか、力があり余って……」

ナギ「そう、なんだ……」

ナギが苦笑いしていると……

カンナ「ちょっとちょっと弟君。ちょっと見て」

カンナが手招きでナギを呼んだ。

ナギは言われた通り、立ち上がって、カンナのそばに移動した。

ナギ「なんですか？」

カンナ「色々調べてみたんだけど、これ凄いよ！なんか色々な機能が付いていて、自分の情報とピュアハーツに関する情報もこの機械に載ってるの！あと、気になるのはこれなんです……いまいちよく分からないの」

カンナがうまく操作して画面を切り替えた。その画面をのぞいてみると、その画面には大きく『フィールドゾーン』と表示されていた。

ナギ「なんですか？これ」

カンナ「私にもわからないけど、とりあえず押してみてもいい？」

ナギ「え！？危険なものだったらどうするんですか！？」

カンナ「まあまあ、そんな時は私と君のピュアハーツで任せればいいじゃん」

ナギ「そんな勝手な……」

カンナ「じゃあ押しまーす！」

ナギ「あ！ちよつと！」

なんのためらいもなくカンナはボタンを押した。すると画面には『フィールド展開』と表示された。突然、画面が光しだした。

ナギ「え？なに！」

カンナ「な、なんなの！？」

光がその場にいる全員を球状に包みこんだ。全員を包んだ球状の光が小さくなると、そこにはナギ達の姿がなくなつた。

楕円状に広がる人工芝生。それを囲むように階段状の観客席が並んでいる、まるでサッカースタジアムみたいな場所。そのフィールドに光の球体が現れ、球体が消えるとそこに、さつきまで家にいたナギ達が現れた。

ナギ達は何か起こつたのかわからず、ただ、辺りを見渡していた。

ナギ「ここは……どこ？」

マナミ「広いのだ！」

トラベル「ここは見たところサッカースタジアムのようですね。しかし、現在地が不明です」

カンナ「そうね。ん？」

カンナが無意識に頭を上にあげると、空に透明な何かが覆われているのを見つけた。

カンナ「……そうか。そういうことか」

ナギ「何がそういうことなんですか？」

ナギの問いに上を向いていたカンナは彼に目を合わせた。

カンナ「私の考えだけど、ここはどうやら異空間のようだね」

ナギ「異空間？」

カンナ「そう。上を見上げてみて、空にバリアーみたいな透明な物体が覆われているでしょ？」

ナギは上を見上げてみると、カンナの言うとおり、空に六角形のガラスの様なものがいくつも連なって、空を覆っていた。

ナギ「ほんとだ……でも、なんでここに来たんだろう？」

カンナ「おそらくこれね」

カンナは手に持っていた小型機械を見せた。

カナナ「これには、私にも知らない機能が内蔵されているらしいの。ここに来たのはさっき表示されていた『フィールドゾーン』を押しってしまったからね」

ナギ「なるほど……」

マナミ「のう、カナナよ」

マナミがカナナに尋ねてきた。

カナナ「どうしたの？」

マナミ「ここが本当に異空間なら、何をしても元の世界には影響はないのか？」

カナナ「ん〜、詳しくはわからないけど、たぶん大丈夫じゃない」

ナギ「たぶんって……」

いい加減な言葉につっこむナギ。

レーネ「と、なると……」

マナミ「ここなら思う存分力を使ってもよいのだな！」

マナミは興奮して目を輝かしていた。

マナミ「よし！ならば早速やるつもりではないか！」

そう言つて、マナミはナギ達から離れた場所に行き、向きを変えて構えた。

マナミ「さあ始めようではないか！誰が私の相手をするのだ！」

ナギ「マ、マナミ！どうしたの!？」

カウラ「きつと、あの姿になって力がどうの様になったのか試したいのしょう」

すると、カウラがナギの横を通り、前に出た。

ナギ「カウラ？」

カウラ「では、私がお相手いたしましょう」

カウラが自らマナミの相手になった。

ナギ「カウラ、大丈夫なの？」

心配するナギに対し、カウラは安心させるように笑顔を作り、

カウラ「はい。心配してくれてありがとうございます。では」

カウラは再び向かい合った。

ナギ「大丈夫かな……」

カンナ「大丈夫だと思うよ」

心配してると、カンナがナギの肩に手を軽く置いた。

カウラ「それよりも、私達も離れた方がよさそうだ」

そう言っつてカンナはナギ達を連れて、観客席の方に向かった。

マナミ「うむ！では参るぞ！」

気合いが入ったマナミは手を上にあげた。

すると、彼女の上に突然、謎の穴が開き、彼女はその穴に手を突っ込んだ。

入れた手をゆっくり引き抜くと、彼女に手には背丈の2倍の大きさのある、巨大なトマホークが握られていた。

カウラ「ほう……」

一方のカウラは驚いた様子はなく冷静だった。

カウラも同じ突然現れた穴に手を突っ込み、中から捻じった角が飾られて、その角と角の間に緑色に輝く宝玉が浮でいる杖を取り出した。

ナギ「武器？」

観客席を歩いている、ナギは足を止め、フィールドにいる二人が持っている武器を見た。

カンナ「ピュアハーツにだって武器を持つのもいるよ」

ナギ「そうなんですか」

ナギは近くの席に座り、二人の戦いを見守る事にした。  
ナギが座ったことにより、カンナ達も席に座ることにした。

マナミ「では、行くぞ！」

マナミは助走を付け、飛び上がった。小さな体に大きな斧を持つているにも関わらず、高い位置まで飛び上がり、斧を振り落とした。  
が……

カンナ「サイクロン！」

カウラの持っている杖の宝玉が光った。  
すると突然、強い突風が発生した。

突風を受けたマナミはバランスを崩し、そのまま地面に落ちそうになったが、一瞬でバランスを立て直し、地面に着地した。

マナミ「ふん！どうやらお主は風に属するものようだな！」

カウラ「はい。そういうあなたは属性はわかりませんが、それほどの斧を持ち上げれるとはパワータイプそうですね。私にはあなたほどの力はありませんが、技なら負けませんよ？」

マナミ「うむ！ならばこちらは全力で挑むのみ！」

マナミは斧を持ち上げ、地面に強く振り落とした。  
すると、地面に地割れが起こり、そのまま真っすぐにカウラに向かった割れて行った。

カウラ「！」

カウラはそれをジャンプでかわした。  
しかし、マナミはにやりと笑い……

マナミ「かかったな！」

マナミはしゃがみだし、斧を持っていない手で、地面にふれた。  
すると、地面から土でできた巨大な槍が6本、空中にいるカウラに  
めがけて、飛び出してきた。

カウラ「エアダガー！」

カウラは杖を横に振り、風邪で作った無数のダガーを出現させ、6  
本の槍に放ち、破壊した。

崩れ滅びる槍の中をカウラはゆっくりと地面に着地した。

ナギ「凄い……なんか凄い！」

観客席で見ていたナギはとても驚いていた。

カンナ「ああ、私もだ。これほどの戦いは初めてみた」

カウラも思わず、声がこぼれた。

ナギ達はその戦いを見ているそばでは、コトネが落ち着きがなさそ  
うにつずうずしていた。

そして……

コトネ「んー！ちゅー！ー！ー！ー！」

コトネは我慢できずに席から立ち上がり、叫んでしまった。ナギ達

は驚き、コトネを見た。

ナギ「コトネ、どうしたの？」

コトネ「あつ……、ごめんなさい。二人の戦いを見ていたら、ボクもなんだか戦いたくなっちゃって……」

ナギ「え？」

ナギは啞然した。

すると、今度はレーネが立ち上がった。

レーネ「じゃあ、私と戦ってみますか？」

コトネ「え！？いいんですか！？」

レーネ「うん。私もじつとしていられなくて」

コトネ「じゃあやみましょう！すぐやみましょう！早速行きましょう！」

コトネは一人先にフィールドへ向かった。

レーネも後を追うが、途中、何かを思い出した。

レーネ「あ、そうそう。お兄ちゃんこれ」

レーネはポケットから何かを取り出し、握ったまま差し出した。

ナギが手を差し出すと、レーネの何かを握っている手が乗っかかり、手を広げた。

ナギのその手には軽い重量感があった。

レーネの手が退けると、その手には赤い炎の絵が刻まれたメダルが乗っかっていた。

ナギ「これは？」

レーネ「あの時の怪物を倒した時に出てきたの。でも、それはお兄ちゃんが持っていて」

レーネはそう言い残し、コトネの後を追った。

メダルを持ったナギはそのメダルをいろんな角度で眺めた。

トラベル「それは、エレメントメダルですね」

後ろにいるトラベルが話しかけてきた。

ナギ「エレメントメダル？」

トラベル「はい。エレメントメダルはデスイーターの能力向上のためのアイテムです。しかし、ピュアハーツにも使えます。メダルは色と刻まれた紋章によってさまざまな能力を使えます。ちなみにナギさんが持っているそのメダルは赤。よって炎の技が使えるようになります」

ナギ「なるほど……」

トラベル「注意事項。ピュアハーツにリンクすることは可能ですが、そのメダルを取り外すことはできません。よく考えてご使用ください」

ナギ「うん……」

ナギは視線をフィールドに向けた。先程の二人が戦っているところから離れている場所で向かい合ってる二人に視線を向けた。

レーネは拳を握り、体制を低くして構えた。

対するコトネは何かを念じ始めた。

すると、しつぽが光りだした。

光が収まると、しつぽの色が黒くなり、先端に槍の様なものが装着されていた。

レーネ「それがあなたの武器ですね」

コトネ「はい！それでは行きます！」

コトネは正面に向かって走り出した。

レーネに接近し、体を回転させ、強化されたしつぽをレーネの腹部に叩きつけた。

レーネ「！」

それを防ぐことができず、腹部に命中した。

その痛みにレーネは膝をついた。

レーネ「・・・やりますね。・・・油断しましたよ」

コトネ「はい！僕だって、先輩のためなら戦います！そのためにも自分の戦い方を知らなければならぬんです！」

レーネ「そうですね。でも、私だって！」

レーネは立ち上がり、構えなおした。

レーネ「今度はこっちから行きます!」

レーネは体勢を低くして、目にも止まらぬ速さで走り出した。

コトネ「!?!」

コトネは驚いた。

それはいきなりレーネが目の前に現れたからだ。

レーネは足で蹴り上げ、コトネを宙に浮かばせ、さらに回し蹴りを放った。

コトネ「ちゅーーーーー!!」

コトネは吹き飛ばされ、壁に衝突した。

コトネ「やりますね。さすがです」

コトネは立ち上がり、構えた。

レーネ「私だって、みんなと同じ、主であるお兄ちゃんを守りたいんです」

レーネも再び構えなおした。

ナギ「……みんな、凄い……」

ナギは4人の戦いを見て驚いていた。

カンナ「うん……」

カンナは4人の戦いを見て何かを考えていた。それに気付いたナギは尋ねてみた。

ナギ「あの、どうしたんですか？」

カンナ「いや、4人の状態をこの計測機能搭載の眼鏡で調べてみたんだけど、普通のピュアハーツよりさらに能力が高いの。これも今までなかったことだから」

ナギ「すごいんですね。あの子たちは」

カンナ「……いや、すごいのは君の方だよ」

ナギ「え？」

カンナの言葉を聞いたナギは耳を疑った。

マナミ「ナギ！私は満足したのだ！腹が減ったのだ！」

ナギ「あつ、うん。じゃあ、帰ろうか。レーネ、コトネ、帰るよ」

レーネ・コトネ「はい！」

戦っていたレーネ達を呼び寄せ、ナギ達は一か所にあつまり、カンナが位階を操作し、元の世界のナギの家に戻った。

## 異空間の闘技場（後書き）

今回は今までより長く掛けたと思います。

次回は、崩壊した学校を舞台にして書きたいと思います。

誤字脱字、感想、意見などがありましたら、よろしくお願いします。

## 生徒会長登場（前書き）

長らくおまたせしました！

というか、期待されているかどうかわかりませんが、長い期間が  
んばりました。

お読みください。

## 生徒会長登場

夜。今日、デスイーターが現れ、騒ぎが起こり、半壊した学校でアークジェレイドから派遣された作業員達とそのピュアハーツらが、復旧作業を行っていた。

この作業を見上げて監視しているのは黄童カイとその後ろにいる桃園葵である。

カイ「長官の様子はどうだ？」

カイは振り向かずに、後ろにいる葵に尋ねた。

葵「大丈夫です。薬で眠っております」

あその後、星雲ナギが逃げた後、アークジェレイド四將軍の一人で、ナギの姉である星雲静香が暴れだし、今の半壊した学校にしまった。

静香の暴走を止めるため、カイと葵を含め、学校に在校していたアークジェレイド隊員達が多く犠牲を出しながら、みんなで協力し合い、見事、静香の暴走を止めることができた。

なお、静香は今、校庭の隅に建つてあるテントの中のベットに寝かせている。

カイ「そうか……あの人もあれがなければ、隊全員の憧れだったのに……」

葵「はい。弟であるナギになると、周りが見えませんか。それに隊員がナギに興味があると言ったら、即医療施設行きですからね……」

……」

カイ・葵「はあ……」

カイと葵は思わず、溜息を吐いた。  
二人が悩んでいると……

？「おや？二人してため息なんかついて、どーしたの？」

能天気そうな声が聞こえて、カイと葵は声のする方に振り向いた。

カイ「白龍隊長……」

？「やあ！」

白龍隊長と呼ばれた人物は手を振って答えた。

人物の名は白龍オトハ。

小柄で幼く見えるが、カイよりも一つ年上でつまり、同じ聖天高校に通う三年生。

桃色の髪を二つに分けてツインテールにしている。

目は細く、開いているのさえわからない。

そんな彼女は、この学校では生徒会長をしているが、アークジェレイドの隊員でそのエリートでもある。

今回学校にいなかったのは、上司の命令で別に地域でデスイーターを討伐していたからで、今ここにいるのは討伐を終え、本部に帰還したが、また上司の命令でここに来たのである。

オトハ「それにしても、見事に壊されたね？これも例のピユアハーツが？」

半壊した学校を見上げたオトハは、目の前にいる二人に視線を移し

た。

葵「いいえ。例のピュアハーツが壊したのはそれほど大したことはなかったのですが、このようなありさまになったのは、星雲長官の暴走によるものです」

オトハ「あらら、それは災難だったね、ところで、その星雲長官は？一緒じゃないの？」

カイ「はい。長官は我々が準備したテントで休んでもらっています」

オトハ「そう……」

オトハはゆっくりと、静香が眠っているテントに視線を向けた。

オトハ「ところで、例のピュアハーツとその主である少年はどうしたの？」

オトハはどこか楽しげな声で二人に尋ねた。

カイ「申し訳ありません。星雲長官を止めることを最優先にしてしまい、追跡者を出すことができませんでした」

オトハ「あらら、そうだったの」

カイ「はい。ですが、桃園ならあの少年の行方を知っているか？」

オトハ「そうなの？」

オトハは葵に聞いてみた。

葵は冷静に答えた。

葵「はい。少年の名は星雲ナギ。彼は星雲長官の弟であり、私の親友です」

オトハ「へえ、星雲長官の弟かあ。それでもって君の親友。というと、彼の自宅とかがわかるのかい？」

葵「……いいえ。私は彼とは親友ですが、彼の自宅には行ってません」

そう言ったが葵は嘘をついた。

親友であるナギを自分なりに守りたかったからだ。

それを聞いたオトハは残念な表情になった。

オトハ「そっか、わからないか。じゃあ仕方ないか」

開き直るオトハ。

それを見た葵はほっと胸を撫で下ろした。

カイ「隊長。今回現れた星雲……長官の弟のピュアハーツなのですが……」

オトハ「わかってるよ。報告書にはそのピュアハーツは、我々にはできなかったデスイーターにとらわれた人を助け出し、おまけにエレメントメダルまで手に入れちゃったみたいだね？」

カイ「はい。やはり、あのピュアハーツは素晴らしいです。ですがなぜ！あいつがあのだまごを持ち出し、あの少年に渡ってしまったのか……！」

オトハ「まあ、過ぎたことは仕方ないよ。こうなってしまったら、あの少年をアークジェレイドに加わってもらうしかないよね」

？「それはならん！」

オトハの提案に賛成しない者がこちらにやってきた。

その者は、腰まである艶のある美しい薄紫色の髪を垂れ流し、釣り上った尻目に蒼い瞳。鼻筋が通って、綺麗に整った顔。

モデル並みの体系に似合わず、着ている制服の間から濃満な胸が飛び出していた。

その人物の名は星雲静香。

アークジェレイドの長官で、ナギの弟である。

そんな彼女がオトハ達のいる場所までやってきた。

葵「長官！」

静香「私が寝ている間に、私のナギちゃ・・・弟に何をつもりだ？」

オトハ「いや、何って、弟であるナギ君を我々の仲間にしよつと・・・」

・・・

静香「気安く弟の名を口にするな！そんなことは私が許さん！」

カイ「というか、なぜだめなのですか？」

静香「……………あの子には無理をさせたくはない。ただ自由に生きて欲しい。それにナギは体が弱い子だ。無理なことをさせると倒れてしまう」

カイ「……………」

葵「長官の言うことには賛成します。私もナギとは中学からですが長い付き合いですので、彼にはこんなことはさせたくはないと思います」

静香「長い付き合い？」

突然、静香は葵を睨んだ。

理由は葵が『長い付き合い』と言ったことで、静香が睨みつけたのだ。

その殺気に気付いた葵は慌てて……

葵「いやっ！その付き合いではなく、友達としての付き合いです！」

静香「そう。だったらいいわ。だが、もし私の弟に色目を使ったらその時は……覚えておきなさい」

葵「は、はい……………」

オトハ「しかしですよ。あの少年のピュアハーツがあれば、ディスプレイターに取り込まれた人の救助が……………」

静香「オトハ。貴様は仲間になりたいのはナギではなく、例のピュアハーツではないか？それではまるでナギがおまけの様じゃないか？」

オトハ「がつ……………！」

オトハは今自分がしようとしていることに気付いた。

オトハ「欲望の心。それがデスイーターを生み出している。気をつける」

オトハ「……はい。自分でも気付きませんでした」

静香「さて、今日はこれくらいにしよう。私はこの作業を監視する。お前たちは帰りなさい」

オトハ「いえ。私は本部から言われてここに来ました。だからここにいます」

カイ「私もです。もともとは私がしっかりしなければこんな事には……」

葵「先輩達が残るのなら、私も残ります」

静香「そう、わかった。私は少しの間席をはずす。それまでの間、監視を頼む」

三人「はっ！」

三人は敬礼をして、静香を見送った。

静香は元来た道を歩き、テントに入り、自分が寝ていたベットの上に腰を掛けた。

そして、胸のポケットから一枚の写真を取り出した。その写真には綺麗な花が咲いた花瓶を運んでいる少年の姿がアップで写っていた。その写真を見ている静香は凛々しい眼が、今では尻目が垂れて、さつきまでとは別人で、近寄りがたい雰囲気から、穏やかな雰囲気を出していた。

静香「……ナギちゃん、ごめんね。あの時は我を忘れたからまとも  
に話せなかったね？本当は入学式に会って、おめでとうつて言いた  
かった。それから抱きつきたかった。私は楽しみにしてた。なのに  
本部から命令を受けて、学校に行けなかった。ごめんね、祝えなくて  
……会いたい。会いたいよ……ナギちゃんに会いたいよ」

静香は静かに写真を折らないように胸に抱いた。

そして、学校の方では……

カイ「そう言えば、隊長。他の奴らはどうしました？」

オトハ「ん？ああ。他はみんなデスイーターの討伐に出ているよ。  
このところ、やけにあいつ等が強くなってるからね、どうした  
どう？」

葵「確かに、中にもエレメントメダルを持った者や、人型のデスイ  
ーターが出現したと言う噂が出ましたからね」

カイ「進化している、と言うことか」

オトハ「そうだね。それに人型のデスイーターは何人が集まって組  
織まで作ってるって噂もされてる。どうなっているのだろうか。こ  
の街は」

オトハは何気なく空を見上げた。

夜空には満点の星が輝いていた。

生徒会長登場（後書き）

ムツキ「……なあ、作者？」

はい。何でしょう？

ムツキ「……お前は今まで何をやっていたんだ？」

いや、なかなか思うように話が思いつかなくて、どうするか迷ってました。

ムツキ「……そうか。だが、俺はナギのピュアハーツを撮れば十分だ」

は、はあ……

ムツキ「……ところで作者？」

はい？

ムツキ「……今回は白龍オト八という者が初登場したようだな？」

はい。白龍オト八は見かけは中学生ですけど聖天学園の3年です。

ムツキ「……ほお」

そして、白龍オト八の身長はこれくらいです。

ナギ<コトネ<オト八<ムツキ

ムツキ「……俺より小さいのか？」

はい。ところで、ムツキ君は何をしているんですか？

ムツキ「……美少女写真集のチェック」

……

ムツキ「……買うか？今なら安くしておく」

さて、次回はいつになるかわかりませんが、楽しんでお待ちください。

次回はまたナギ君の家で一日を終えたいと思います。自分でもなんですけど、一日って長いと感じました。

誤字脱字、意見、感想などがありましたら、よろしくお願いします。それではまた。

ムツキ「……安くしておく」

もういいです！

## 一日の終わり

カンナ「結婚してくれ」

ナギ「なんですか？いきなり。というか、いやです」

カンナから突然告白されたナギはすぐに断った。

今ナギ達は、夕飯を食べている。

今日は人数が多く、張りきったナギは腕に載りをかけ、夕飯を作った。

ナギの手料理を食べたカンナは、そのうまさで告白したのだ。

カンナ「いや〜、これおいしいね。ほんとに！実を言うと私、アーケジエレイドを抜けてからろくなもんしか食べてなくて、こんな豪華な夕食にあり付けたのは久しぶりだよ」

ナギ「はあ……」

カンナ「特にいいのがこの肉料理！香ばしい匂いで私の嗅覚をくすぐり、食欲をそそり、食べた時の感触は歯ごたえがあって、ピリ辛な味付けで私の味覚を唸らせる。さらに噛めば噛むほどに肉汁が溢れだて、もうっ！さいこ〜！だから結婚してくれ！」

ナギ「やです！」

きっぱりとカンナの申し出を断るナギ。

カンナ「つれないな〜。いいと思ったんだけどな〜。それにしても、この子たちは大丈夫かい？」

周囲を見渡すと、ナギとカンナ以外のピュアハーツ5人が全員同じ姿勢で固まって、両手に箸と茶碗を持って、口、鼻、目、耳から強い光が溢れだしていた。

それは、ナギの料理を初めて口にした現象だった。

そのため、ナギの家はいつも以上に明るく、その明るさは家の内側から膨らんで今にも弾けそうな程だった。

カンナも5人と同じになっていたが元に戻るのに個人差があって、唯一早く元に戻ったのである。

ナギ「たぶん、大丈夫だと思いますよ？前に友達を呼んでごちそうした時もこんな感じでしたから」

カンナ「ふん」

カンナは再び、料理を口に運んだ。

そしてまた、あの5人と同じ現象になった。

ナギ「早くしないと、片づけられないんだけどな」

そう言っただけで愚痴をこぼしたナギは食事を進めた。

カウラ「ナギ様の手料理おいしかったです」

5人が無事に戻り、食事を終えたあと、食器を運んでいるカウラは、カウンター越しの流し場で食器を洗っているナギにそう言った。

ナギ「お粗末さま。そう言ってもらえるところいいよ」

レーネ「でも、お兄ちゃんの料理は威力が強すぎでしたよ？」

今度はテーブルを拭いているレーネがそう言った。

コトネ「確かに、先輩の料理はおいしいんですけど、威力がありすぎて、お箸が進みませんでしたね」

ナギ「そうかな？それでも普通に作ったつもりなだけど……」

マナミ「……あれで普通と言うレベルか、なのだ……」

洗った食器を拭くコトネがそう言い、食器を棚に戻しているマナミが突っ込んだ。

カンナ「あ、弟君。話があるけど良いかな？」

ソファアに座っているカンナが呼んできた。

ナギ「すみません。あとちょっとで……」

レーネ「お兄ちゃん。あとは私達がやるからいいよ」

ナギ「大丈夫だよ。あとちょっとで終わるから」

レーネ「いいの。お兄ちゃんは私達の主様だから、頼ってください」

ナギ「うん、わかった。じゃあお願いするね」

レーネに流し場を任せ、カンナの所に行った。

ナギはカンナが座っている正面に立った。

ナギ「で？話と言うのは？」

カンナ「ああ。君に頼まなければならないことがあるの。これは重要なことなの」

すると、カンナの表情が真剣な顔になった。それを見たナギは、緊張して固唾を飲んだ。

ナギ「じゅ、重要なことって？」

カンナ「そう重要なことよ。私にとって君にとって」

ナギ「……そう言えば、トラベルさんは？」

紛らわすために、トラベルの行方を尋ねた。トラベルは食事の後、姿を消していた。

カンナ「トラベルには大事な物取ってきて貰ってるわ」

カンナは立ち上がり、ナギと向かい合った。

カンナ「弟君。お願いするわ」

ナギ「な、なんででしょう？」

突然、カンナ足をたたんで正座し、手をそろえて、頭を下げた。

カンナ「私をしばらくこの家に泊まらせてください！」

ナギ「はあ？」

突然のカンナの言葉で状況が読めないナギは啞然した。

カンナ「実は今もアークジェレイドに追われてて、それにもう食料が尽きて困ってるの。お願い！少しの間だけでもいいから、ここに住まわせて！」

ナギ「……」

カンナ「お願い！この通り！その代り、私ができることなら何でもするから！」

ナギ「……わかりました。いいでしょう」

考え出した答えがそれだった。

すると、カンナは頭を上げ喜びの表情になっていた。

カンナ「いいの！？」

ナギ「はい。家はこう見えて広い方ですから。カンナさんは一階の空いている部屋でお願いします。それと、家の手伝いは必ずすること。それさえ守れば泊まらせてあげます」

カンナ「あ、ありがとうございます！」

カンナはナギの手を両手で握り、上下に振った。

ナギ「いいんですよ。では、早速部屋に案内しますね」

ナギがカンナを部屋に案内しようとする、台所に通じるドアが開き、そこからレーネ達が出てきた。

レーネ「お兄ちゃん。御片づけ終わりました」

ナギ「ありがとう。あ、そう言えば、レーネ達が寝るところ考えないと……」

カウラ「その心配には及びませんよ」

ナギ「えっ？」

マナミ「ナギよ。私達が何なのか忘れたのか？」

コトネ「ボク達ピュアハーツは住む場所が決まってるんです。普段は籠ですけど、先輩の場合は、あの端末ですけど、そこに住みます」

ナギ「そう、なんだ……」

レーネ「そう。だから心配しないでいいんですよ」

そう言っつてナギの頭をなでた。

ナギ「ん〜、子供扱いしないで欲しい……」

カウラ「ナギ様。他に何か手伝ってほしいことはありますか？」

ナギ「う〜ん。今のところないよ。じゃあ、お風呂に入ってくれませんか？お風呂は狭いから順番決めて二人ずつ入ってね。僕は最後に」

いいから」

カウラ「わかりました」

ナギ「お願い。じゃあ、カンナさん、行きましょう」

そう言つて、カンナを連れて廊下に出た。

廊下を出てその奥にあるお客様用の部屋の前に来た。

ナギ「ここですよ」

ナギは扉を開けた。

その部屋は和風で畳が敷かれていた。

カンナ「へえ、結構いい部屋だね」

中に入って辺りを見渡し、感心するカンナ。

ナギ「ありがとうございます。じゃあ、今日はもう遅いですから、リーネ達がお風呂から上がったからお風呂にはいってください」

カンナ「いや、遠慮しておく。明日の朝に入らせて貰うから」

ナギ「そうですね。わかりました。それでは失礼します」

カンナ「うん。おやすみ」

ナギは部屋から出て、自分の部屋に戻ろうとした。

その時、浴室の前を通ると、扉の声から声が聞こえた。

レーネ「カウラさん……胸、大きいんですね」

カウラ「そ、そうでしょうか？」

レーネ「はい。あの触ってもいいですか？」

カウラ「え、そ、それは……キャツ！」

レーネ「うわぁ……思っていた以上に大きい……」

カウラ「ちょ、ちょっと！レーネさん！」

レーネ「羨ましい。私もこんなに大きかったら」

カウラ「好きで、大きくなったわけじゃ、キャフン！」

レーネ「今の台詞は胸がない私にとって言っちゃいけないことです  
！」

カウラ「あつ！レーネさん！そんなに強く握らないで！ああん！ぐりぐりまわさないで〜！！」

ナギ「……」

聞いてしまったナギは顔を赤め、俯いた。

ナギ「何、考えてるんだろつ、僕」

すると、前の方から扉のあける音が聞こえた。

正面を見ると、そこには大きな鞆を両手に一つずつ持って、肩にか

けるバツクを2個もかけて、そして多くの物が包まれて大きく膨らんでいる風呂敷の包みをしょっているトラベルが玄関に立っていた。

ナギ「トラベルさん。今までどこに……」

トラベル「ただいま戻りました。マスターからの命令で荷物を取ってくるようにと言われました」

ナギ「あつ！（大事な物つてこれだったのか）そうでしたね。カンナさんは奥の部屋にいます」

トラベル「わかりました。それでは」

トラベルは玄関から上がり、廊下の上を歩き、奥の方へと歩いて行った。

それにつれ、トラベルが歩くたびに、床が軋むような音を出していた。

ナギ「あんなに大きな荷物を軽々と、機械系のピュアハーツはパワーがあるんだね」

ナギは独り言を言って、2階にある自分の部屋に入って行った。

コトネ「センパイ！お風呂あがりました」

ナギ「うん。今行くよ」

コトネ達が風呂から上がったことを知らせ、ナギは風呂に入った。

その後、寝巻に着替え、髪を乾かして、自分の部屋に入って行った。レーネ達はもう眠いと言って、あの端末に光となって画面に入ってしまった。

ナギはベットに座り、一息ついた。

ナギ「今日は色々あったな。デスイーターに襲われそうになったり、人の姿になったピュアハーツにあったり、カンナさんにあったり、ほんと色々なことがあったな」

そう言ってナギはしばらく一人の時間を過ごし、ベットに入り、電気を消した。

まだ目を開けていたナギは視線を天井から机に置いてある端末に移して、再び天井に視線を戻した。

ナギ「明日は良いことがあるといいな」

そう言って瞼を閉じて、眠りについた。

## 一日の終わり（後書き）

誤字脱字、感想、意見などありましたらどうぞよろしくお願いします。

眠りの羊の子(前書き)

新キャラ出ます！

ぜひぜひご覧ください！！

## 眠りの羊の子

朝。ナギの部屋。

ナギはベットのうえでぐっすりと眠っていた。

それはなんとも愛らしく、一瞬寝取ってしまった寝顔だった。

そんな時、タイマーをセットした目覚まし時計がジリリリッと鳴った。

ナギ（うーん……）

それをやかましく思ったナギは腕だけ伸ばして、目覚ましを平手打ちのように押した。

腕を引っ込めて、二度寝すると、妙な感覚があった。

ナギ（ん？なんだろう、これ？）

どうやらナギは何か抱きついたようだ。しかし、ナギには抱き幕を買った覚えはなく、それは足まで届いているので枕でもない。

ナギ（でも、なんか居心地が、良い……）

その抱いているのが、どうも居心地が良くて、ずっとこのままではないという気持ちになった。

そして、ギュッと強く抱き締まると……

？「きゃん」

ナギの耳に聞き覚えのない声が聞こえた。

ナギ（ん？）

もう一度抱き締まると、また声が聞こえて来た。

？「もう、なあくんだったら。あんまり強く抱きしめると恥ずかしいよ」

その声は困っているようで嬉しいと言った感じだった。

その声に聞き覚えがないことにはっきりしたナギは重い瞼を開けた。すると、目の前に見たことがない少女が横たわっていた。

察してナギはその少女に抱きついていていたということになる。

ナギ「なっ、なっ………！」

？「あっ、目が覚めたあ？おはよう」

ナギ「うわあああああああ……！」

ナギは驚き、声を上げてベットから落ちてしまった。

ベットから落ちた音が響き、机の上に置いてある昨日現れた謎の端末の画面が光りだし、そこから人型ピュアハーツのレーネ、カウラ、コトネ、マナミが飛び出した。

レーネ「どうかしましたか！？お兄ちゃん！」

コトネ「さっき大きな音が聞こえましたけど………」

ナギ「あれ！あれ！」

ナギはベットにいる少女を指さすが、レーネ達はただナギを見つめていた。

ナギ「あれ？どうしたの？」

ナギがなぜ、見つめられているのか聞こうとすると、カウラが口を開き……

カウラ「あの、ナギ様ですよね？」

意味不明なことを聞いてきた。

ナギ「そうだけど？」

コトネ「先輩。いつの間か髪が伸びてますよ？」

ナギ「え？」

マナミ「それに少し背が縮んでおるのだ」

ナギ「え！？」

そのとたん、ナギは立ち上がり、鏡が飾ってあるタンスを開いた。すると、そこに映っていたのは白と黒が混ざり合った髪を腰まで垂れ流した美少女、否、ナギがそこにいた。

ナギ「な、なんで……ハッ！」

急にナギは部屋を出て、階段を下る足音を響かせながら走って行った。

トラブル「おはようございます。皆さま。先程、ナギ様が出て行っ

たようですが、何かありましたか？」

ナギとは入れ替えに今家に泊まっている元アークジェレイド、星天治カンナのピュアハーツ、トラベルが入ってきた。

カウラ「まあ、何かあったと言えば、あれですけど」

カウラはベットで寝ている少女に視線を向けた。

その少女を良く見てみると、ふわふわな白い髪に幼さの残る白い肌で柔らかそうな顔。

着ている服は桃色のパジャマで、その間から豊満に膨らんだ胸が実っついてスタイルがいいことが分かる。

そしてその少女には、頭に羊の様な角と腰にしっぽが生えていた。

トラベル「また、ナギ様のピュアハーツですか？」

マナミ「そうらしいのだ。……ところでトラベル。カンナはどうしたのだ？」

トラベル「はい。まだ眠っております。昨日は私と一緒にお酒を飲んでいましたから」

トラベルはそう言ったが、機械系とアンドロイド系のピュアハーツには酒を与えてはいけないのだが、カンナが飲み友達を作りたいかつたらしく、トラベルに少し手を加えて飲めるようにしたのだ。

マナミ「そうか。意外にスポラなのだ」

マナミがそう言ったあと、どこか安心したような顔をしたナギが入ってきた。

トラベル「おはようございます。ナギ様。今日は髪が伸びていて可憐さが増していますね。それに身長も少し低くなって、おまけに肌の張りもよくなっていますね。まさに街を歩けばそこにいる全ての女性が嫉妬してしまいそうな美少女の容姿です」

ナギ「嬉しくないから！表情が一つも変わらずに言わないでください！それにこの容姿はコンプレックスです！」

トラベル「さようですか」

トラベルは納得して頷いた。

ナギにはコンプレックスがある。それは姿からして少女に見えるからだ。過去に中学の女子から女装されそうになったり、見ず知らずの男の人にナンパされたりと苦労をしている。

しかし、この外見でも良いところがあって、それなりに少しはいいと思っている。

ナギはベットに寝ている少女に近づき、彼女の体を揺らした。

ナギ「お〜い、起きろ〜」

？「ZZZ……」

強弱付けて揺らしてみるも、少女は起きる気配はなかった。

ナギ「ダメだ。起きない……」

トラベル「彼女の姿から察するに、どうやらおひつじ座の擬人ピュアハーツのようですね。この種類のピュアハーツは眠りの深いものがあります」

ナギ「とにかく、まずこの子を起こさないと。もうっ！起きないんだったら……チュウ、するよ?」

突然、とんでもないことを口にしたナギは口をふさいぎ、赤面した顔を背けた。

すると、その言葉に反応したように少女は仰向けに向きを変えた。

ナギ「……起きてるね?」

?「……えへ ばれちゃったか?」

少女は笑いながら起き上がり、腕を上には伸ばし欠伸をした。

レーネ「ねえ。あなたもお兄ちゃんのピュアハーツなの?」

?「はい。私は夜中で生まれました」

レーネが聞くと、少女は眠たそうに答えた。

レーネ「そうなの?」

?「はい」

トラベル「就寝している間に生まれてくるピュアハーツもいますよ」

?「あの～なあくん。お願いがあるんだけど」

ナギ「ん?何かな?」

？「うん。私に〱名前を〱付けて欲しいの」

ナギ「ああ、名前ね。そうだな、何にしよう……ん？」

ナギが付ける名前を考えていると、いつの間にか少女はまたナギのベツトで眠ってしまった。

？「ZZZ……」

レーネ「……寝てる」

マナミ「マイペースな奴なのだ。気持ち良さそうに寝おって」

ナギ「ほんと、気持ち良さそうによく寝てるね。だったら、名前はユメにしよう」

カウラ「ユメ……確かによく寝るこの子にはピッタリですね」

ナギ「うん。ユメ、これからよろしくね」

ナギはまだ寝ているユメの頭を優しく撫でた。  
ユメはさらに気持ちよさそうな寝顔になった。

## 眠りの羊の子（後書き）

イズ「ほう。眠りの羊の子、ユメですか」

はい。羊を擬人化するなら、こつこつ雰囲気の子が良いかなと思って書き上げました。

イズ「結構！僕も美少女が出てきて嬉しいです！これかも頑張ってください」

ありがとうございます。

ちなみにユメの身長はこれくらいです。

あかり＝レーネ＝ユメ

イズ「ほう。意外ですね」

はい。身長はどれくらいがいいか、悩んでしまいましたがいいか、悩んでしまっています。

考えが変われば、身長が変わるかも知れません。

イズ「なるほど」

では、次回はユメを囲んだ朝食を描きます。

誤字脱字、感想、意見などありましたら、どうぞよろしく願います。

イズ「ではまた、投稿する日まで」

祖父からの贈り物（前書き）

大変長らくお待たせしました。

最近忙しくて更新できませんでした。

誠に申し訳ございませんでした。

## 祖父からの贈り物

新たに仲間になったユメを囲んだ朝食。

ナギは自身の変化は置いておくにして、朝食を取ることにした。

昨日の件以降、ナギとユメを除いて、忍耐力が強いのかみんな気絶することなく箸を進めた。

ユメ「……………」

ユメは初めてナギの手料理を食べて、穴と言う穴から光が溢れていた。

カンナ「ふあ~~~~、もう朝か、みんな起きてる？」

ナギ「あ、カンナさん。おはおうございまブツ」

ナギは一瞬吹き出しそうになった。

それは部屋に入ってきたカンナが下着姿だからだ。

良く見てみると、カンナは胸がないがプロモーションがいい。モデ  
ルとしてもいけるくらいだ。

ナギ「かかかカンナさん！なんて恰好してるんですか！」

まるで、母親の様にナギは叱った。

対するカンナはまだ目覚めたばかりなのか、目をこすっている。

カンナ「ん？ああ、そうか男の子だもんね。いや、ごめんごめん。  
普段はトラベルと一緒にだから、こうして家の中をぶらぶらしてたの  
よ」

ナギ「なんでもいいですから。早く服を着てくださいー！じゃないとご飯抜きですよ！」

カンナ「はは、はいはい」

ナギ「はいは一回」

カンナ「は〜い」

そう言つてカンナは部屋を出た。

ナギ「も〜あの人は一体何を考えてるんですか」

トラベル「ナギ様。申し訳ございません。私のマスターがご迷惑を  
かけまして……」

ナギ「いいですよ。気にしないでください」

トラベル「ですが、叱るナギ様の姿は母親の感じが出ていました」

ナギ「ははっ、母親ね……」

コトネ「お母さん、御代りです！」

マナミ「母上、私もなのだ！」

ナギ「はいはい。御残しは許しませんよ」

そんな和やかな空気で朝食を取った。

朝食を終え、食器を片づけることになった。

食器を運ぼうとするとレーネ達が片づけは自分たちがやると言っ  
て、ナギの代わりに片づけることになった。

やることがなくなったナギはソファに座ることにした。

しかも、なぜかユメがナギの膝を枕代わりにして眠っていた。

それを興味深そうにカンナが見ていた。

カンナ「弟君。また新たな擬人ピュアハーツが生まれたようだね」

ナギ「はい。名前はユメって言います。生まれたのが真夜中だと言  
っています」

カンナ「そう。でも、良く寝てるね」

ナギ「はい。トラベルさんが羊型ピュアハーツは眠りが深いものが  
いるって言ってました」

ピンポーン

話しの最中にインターホンが鳴った。

ナギ「あっ……」

ナギが立とうとした時、ユメがいることに気付いてどつするか迷っ  
ていると……

カンナ「いいよ。私が行って来るよ」

ナギ「じゃあ、お願いします」

カンナに任せたナギは安心して座りなおした。

カンナ「はい。なんでしよう?」

男「……」

カンナ「あの、そんなに見つめると恥ずかしいんですけど?」

男「えっ! あ! すみません! えーっと、星雲ナギさんのお宅ですよ  
ね?」

カンナ「はい。そうですよ」

男「でしたら、御荷物をお届けにまいりました。これにサインをお願いします」

カンナ「はいはい。はい、どうぞ」

男「はい。ありがとうございます。それでは」

宅配便の男と話したカンナは玄関に上がり、リビングに入った。

カンナ「弟君。荷物が届いたようだけど」

ナギ「はい。わかりました」

ユメ「ふにゃあ?」

ちようどユメが起きてくれて立つことができた。

ナギは荷物の置いてある玄関に向かった。

すると、目の前に冷蔵庫ぐらいの大きさの荷物が置いてあった。

これでは人で持つことができない。隣にカンナがいるが女性の力であんな重そうなものは運べない。

ナギ「結構、大きいんですね」

カンナ「そうだな。宅配者が4人がかりで持ってきたんだよ」

ナギ「とにかく、早いところ運びましょう」

カンナ「ああ。これを運べる人数が揃えばの話だな」

ナギ「……はい」

マナミ「どうしのだ?」

その時、台所で片づけを終えたのであろうマナミがナギ達の後ろに立っていた。

マナミ「この荷物がどうかしたのか?」

ナギ「うん。この荷物を部屋に運ぼうと思って」

マナミ「ふん」

マナミは黙って、ナギとカンナの間を通り、荷物をつかんだ。すると、その冷蔵庫をマナミは軽々と持ち上げた。

ナギ・カンナ「……………」

マナミ「これ、部屋になのだな？」

荷物を肩に担いだマナミは余裕の表情でナギに尋ねた。

ナギ「え？あ、うん」

マナミ「うむ！」

マナミは頷き、啞然する二人を残してリビングに入って行った。

カンナ「毎度のことながら、君のピュアハーツには驚かせれるよ」

ナギ「僕も、びっくりです。はは……………」

部屋に戻ると、運んでもらって荷物が壁際に置かれて、その周りにその荷物が気になるのか、レーネ達が集まっていた。ナギ達がやってくると、来たことに気付いたレーネがナギに聞いてきた。

レーネ「お兄ちゃん。この箱には何が入っていますか？」

ナギ「なんだろう？僕にもわからない。ん？」

ナギが荷物に近づくと、その荷物には手紙が同封されていた。それ取って、差出人を確認した。

ナギ「あつ、この荷物、おじいちゃんからだ」

カンナ「おじいちゃん？」

ナギ「はい。僕のおじいちゃんは世界中を旅してて、珍しいものがあると送ってくるんです」

ナギの祖父は世界のあらゆる秘宝を見つける探検家で、今もどこの国でまだ人が踏み入れたことがない地を進み、危険な仕掛けがある神殿や洞窟で秘宝を見つけている。

その祖父の手紙をナギは袋を開けて、中に入っている折りたたんだ手紙を開けて読んだ。

ナギよ。

元気にしとるか？

今わしはエジプトで秘宝の情報を探しとる。

じゃが今は、家族のことが心配じゃ。

中でもお前は一人暮らしをしているそうじゃのう。

最近ではデスイーターの増えて来とるし、エジプトも同じじゃ。

だからお前にわしが見つけた6つの秘宝を送ることにした。

その秘宝はかつて、強力なピュアハーツを封じたと言われた秘宝じゃ。

きつとお前を守ってくれるじゃろう。

わしが帰ってくるまで無事でいて欲しい。

検討を祈る。

祖父より

と、手紙にはそう書かれていた。

ナギ「おじいちゃん……でも、今はこっちにも強力なピュアハーツがいるんだけど……」

カンナ「へえ、秘宝ね」

コトネ「ねね、早く開けてみましょう！」

ナギ「そうだね。開けてみようか」

ナギは手紙をしまい、箱のふたを開けた。

すると、中には手紙に書かれていた6つの秘宝が詰まっていた。

一つずつ、中から丁寧に取り出した。

まず取り出したのは、鳳凰の模様が刻まれたバットぐらいの大きさの鉄扇。

二つ目に取り出したは、鍔が朱雀の翼の形をした一対の双剣。

三つ目は、炎を吐く青龍の姿を刃先にした薙刀。

四つ目は、白虎の白と黒の毛皮を模した鎧。

五つ目は、玄武の紋章が刻まれた盾。

そして最後は、立派な一角を生やし、側面には麒麟の姿が刻まれた兜。

その六つを箱から取り出し、床に置いて並べた。

その姿は本来は美しかったのであろうか、今は六つとも全体が錆ついで、茶色に染まっていた。

カンナ「ほほう、なかなかの品だね。手紙によると、これらは強

力なピュアハーツが封じているようだけど、トラベル調べてみて

トラベル「はい。マスター」

カンナのそばに立っていたトラベルは前に出て、六つの秘宝の前に座り、目の色が青から緑に変わり、スキヤニングが始まった。数秒が経ち、スキヤニングが終わったトラベルはこう告げた。

トラベル「あいにく、スキヤンしても何も結果が出ていませんでした。おそらくこれらは偽物かと」

カンナ「そうか。弟君、すまないことをした。勝手に調べてしまっ  
て」

ナギ「いいんですよ、気にしてません。でも、せっかっくおじいちゃんを送ってもらった物ですし、大切にします」

その時、ナギのポケットにしまつてある小型機械が振動した。取り出してみると、画面が光りだした。

ナギ「え？何？」

その光が照らしだすと、置いてあった六つの秘宝が光となって、その画面に入って行った。

ナギ「え？」

光が収まり、その場にいる全員が小型機械を見つめた、

ナギ「なっ、何が起こったの？」

カウラ「わかりません。突然光りだし、秘宝がその機械に吸い込まれたようでした」

カンナ「うーん、ピュアハーツの擬人化といい、その機械といい、君の周りに何が起こっているんだ？」

ナギ「……わかりません」

カンナ「まあ、いいけど。せつかくだし、そろそろその機械に名前つけたら？いつまでも名前がないと不便でしょ？」

ナギ「確かにそうですね。……じゃあ、ハーツバイルで、どうかな？」

カンナ「はあ、ネーミングセンスがないな。でもいいんじゃない。ハーツバイルで」

ナギ「はい。ありがとうございます」

その後、ナギ達は荷物を片づけて、自由なひと時を過ごした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3856u/>

---

ピュアハーツ

2011年12月17日00時47分発行